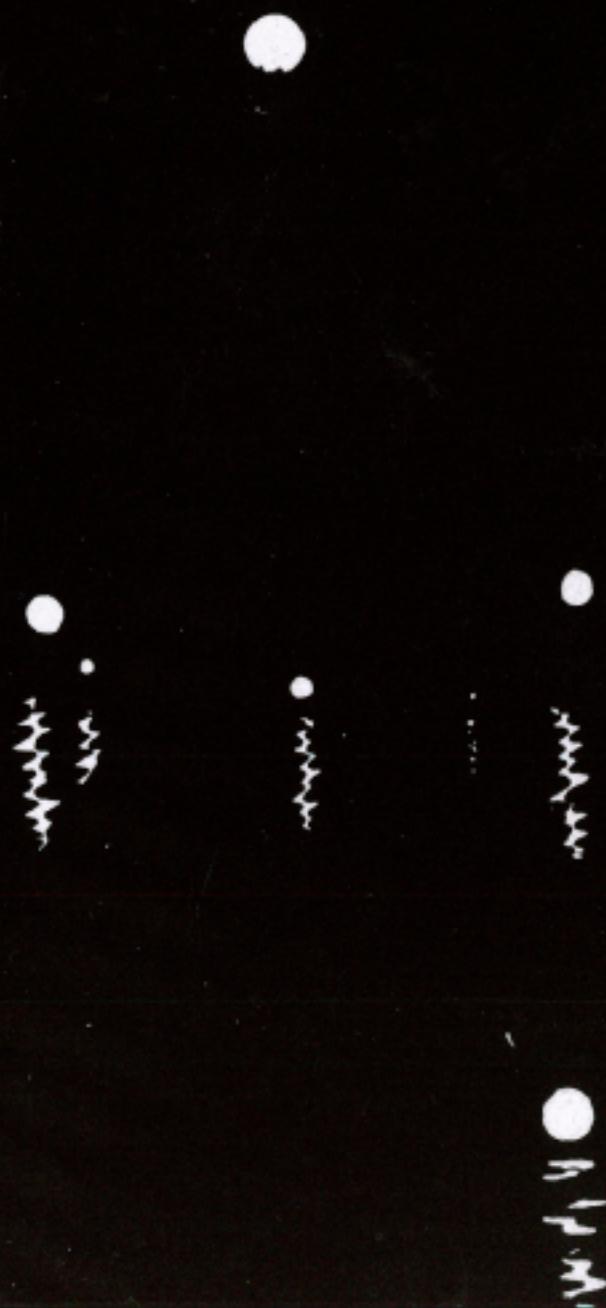


# 泉州国賠つうしん 終刊号



裁判をおこせば、昼夜独居拘禁処遇が待つてゐるかも知れないし、  
果ては仮釈放は完全に望めなくなるかも知れないけど、  
開き直りでも捨て鉢、自棄くそでもなく……

人として生きたいとする、これまで過ごしてきた生き方を止めまで、

また自身をも裏切つてまで社会に出る、ソレに拘り執着するつもりは更々ありません。

これまでの獄中生活を通して、何でもかでも反対、

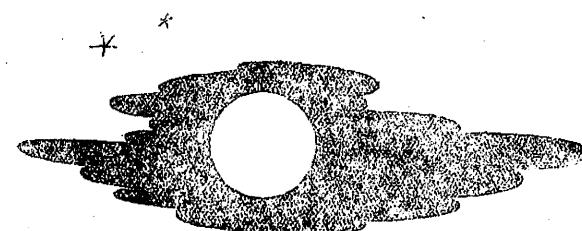
また自分の意に沿わないからと反抗するなどといった、ソレは唯の一度もありません。  
人として最低限許される権利まで放棄して生きることはできなかつた。

私にはゞゝ無理ゞゝあつゞゝも体制の中でつくられたロボット同様の生き方はできないし、  
そう生きる、ソレが矯正でも更正でもないことを考えます。

人として恥ずかしい生き方はすまいとした私なりの、これまでの生き方、  
志を貫きおして生きていく所存です。

浪水博

一九三七年三月一〇日——一九三九年三月二七日



110110年七月一六日、泉水博さんの「順変」義務付け請求訴訟の前には、分厚い壁がそびえ立っている。安田好弘弁護士・山下幸夫弁護士という、私たちにとってこれ以上はない、最強の布陣による超人的な尽力さえはねつけるような——。それは、泉水さんもおちろん承知のうえでした。

だから、昨年の控訴審判決から泉水さんがダメージをうけた様子はなく、同時に、「無事故」の積上げを何度も目前で崩され、体調不良に悩まされつつも、あきらめる」となく、あらたな提訴に希望をつないでいたのです。

しかし、その報せは突然やつきました。私たちのだれもが耳をうたがい、その言葉の意味を、すぐに理解することはできませんでした。泉水さんが、死んでしまった——。「泉水受刑者は一二日夜に刑務所内で心肺停止の状態で見つかり、病院に搬送されたが、二七日に死亡したという。(110110年三月三一日付・各社報道)」それから一年を経て、他に私たちが知り得たことはありません。岐阜刑務所が、適切な処置を行つたかどうか。死因は何か。遺骨はどうにあるのか——を知る手だてすら、ものはや殆どなくなつてしましました。

私たちにできる」として、泉水さんの最後の日々をくわしくお伝えするとともに、泉水さんへの追悼の言葉をあつめ、「泉水国賠つうしん」終刊号として、みなさんにお届けします。

110111年三月一七日 泉水さんの命日に

泉水博さんが逝つてから、もう一年が経つてしましました。生きている者には、逝つてしまつた者のことを思い起こす度に、逝つた者の面影がいつも鮮やかに蘇つてくるのです。

私にとって、泉水博さんの面影は横顔か後ろ姿でしか思い浮かべられません。私も岐阜刑務所で一三年間懲役受刑者をしていました。それも泉水さんと同じフロアだつたのです。

私はうつかり屋さんなので、まさか泉水さんが私の独居房の近くの独居房に移つて来ていたとは、スグには分かりませんでした。それからしばらくして泉水さんのことと囚人間の「連絡網」でそれなりに知ることが出来ました。

そうした情報によつて、刑務所の上級幹部が泉水さんに「お前は生きて(刑務所から)出さないからな!」と他の受刑者の前で言い放つていたと聞きました。泉水さんについてのその他のこととしては、囚人たちに慕われていたということでした。泉水さんはすごい人だといふこともよく聞きました。それを妬む人もいるのも世間というものですから喧嘩を売られる」ともあつたようです。

“ふう&孝”は、反天皇、反軍、反原発等々の運動において、コチラに出たと思えば、またアチラに出るという

## “助つ人”人生 宇賀神寿一

よう、神出鬼没の如く動きを見せる“助つ人”でした。

泉水博さんもまた“助つ人”として生きた人でした。困つた人を見れば、つい手を差し伸ばしてしまう人でした。あと少しで、仮釈放で出所できるという何ものにも代えがたいその機会を蹴つ飛ばして、重病の友人の為に「まともな治療をせよ!」と闘つた泉水さん。更に、ダッカの日本赤軍の人質の身代わりの為に、と、その一念あるのみで海外へ飛んで行ったその行動は大いなる“助つ人”そのものでした。

“助つ人”にコトバはいらない。

カラダが勝手に動いちゃうんだよ、“助つ人”はよお。人が困ついたら、助けたくなるんだよ。

それでまた背負うものが増えてしまう。

“助つ人”人生を生き抜いた人こそ、泉水博さんだつたのでしよう。それ故、同じように“助つ人”人生を生き抜いた“ふう&孝”と太い関係性を繋ぎあつたのだと思います。

あの世があれば、ですが、泉水博さんは“助つ人”をやり続けているでしょう。

# 追悼 泉水博さん

この文章を書いたのは二〇一〇年五月初頭です。岐阜刑務所に服役中だった泉水博さんが同年三月末に亡くなつたことが分かつてから、早くも一年の時間が過ぎていきました。口ナウイルス感染をめぐる世の中の変化と相まって、まだ悪い夢の中にいるような気がします。

## 最後の面会

まず、泉水さんが亡くなつた顛末を分かる限り記しておきます。

私は毎月一回、岐阜刑務所を訪れて泉水さんと面会していました。三月は一六日（月）の午後に行きました。結果的に生前の泉水さんと最後に会つたのがこの日になつてしましました。

面会当日の泉水さんは、これまでにないほど怒っていました。

一月に泉水さんは懲罰を受けました。囚人同士の喧嘩を泉水さんが止めたことが、指導違反になるというのが理由です。

一月初旬のある朝、居室から出て廊下に整列する際、泉水さんの目の前で囚人同士が争う気配があり、泉水さんは思わず

いう考えでした。日本赤軍がどのような組織かも知らず、そして、人質との交換に応じたことで、後に泉水さんが再収監され、残りの人生を刑務所で送ることになろうとは思つてもいなかつたはずです……。

泉水博さんの生涯は終始、人のために行動し、貧乏くじは黙つて自分が引いてきた、と言えるかも知れません。

## 激しい怒りと体調の異変

しかし今回の懲罰への泉水さんの怒りは大きかつたのです。人として正しい行為をしたと自分では考えるものの、一応刑務所でのルール違反であることは泉水さんも認識していたので、「まあ訓告ぐらいで済むかな」と思つていたら、一〇日間の閉居罰を食らつてしまつたのです。

温厚な泉水さんが、怒りをあれだけストレートに表したことは、十数年来のつきあいでも記憶がないほどでした。泉水さんの心身を刑務所の管理体制がどれほどり減らしていたか、思い知られます。

三月一六日の面会では、そのような尋常ではない泉水さんの怒りと、さらにはこの間の体調不良の訴えなどを聞き、後になりました。いつもは一ヶ月に一回だけ面会していましたが、この日の泉水さんの様子を見るにつけ、気持ちの整理が全くついていないようだし、血圧も高く、めまいがして医務室にも行つたといふことも話していたので、三月中にもう一

ず体が動き、仲裁に入りました。もみ合つてゐる一人を背後からおさえ、一緒に廊下に倒れこんだ、ということです。幸い泉水さんの機転の利いた行動のおかげで、争つた囚人同士にはケガもなかつたようです。

しかし、刑務所内のルールとして、喧嘩の加勢はもちろん仲裁に入るのもいけない、というものがあります。泉水さんもそれは当然承知していたが、

「思わず体が動いて止めに入つてしまつた。だつてまわりに刑務官がいなかつたもんだから……」

と語っています。

この出来事は本当に泉水さんらしい行いだと私は思います。泉水さんの最初の刑事事件も自分を守るために巻き込まれたという話をじつくり聞いたことがあります。

また、無期刑で千葉刑務所に服役中、同僚に医療を受けさせたため刑務官を人質にとつて訴えようとした例の事件のことも皆さんご存じでしょう。

千葉刑での単独決起「事件」の後、日本赤軍によるダッカ事件の指名に応じたのも、

「自分が行けば、人質になつた乗客は釈放されるだろう」と

## 度面会に行くことにしました。

### 「その人物は、当刑務所には在籍していない」

三月三〇日（月）の午後のことでした。

私はもうずっと面会に通つてゐるので、岐阜刑務所の正面玄関の受付のおじさん、おばさんたちと顔見知りです。この方たちは刑務官ではなく、民間警備会社から派遣されているようで、受付用紙の記入、番号の呼び出し、防犯ゲートでのチェック業務などをしています。

私の顔を見た警備員のおじさんが、「泉水さんの面会だよね？ 泉水さん、亡くなつたみたいよ」

と声をかけてくるではありませんか。

私は、「エッ！」

としばらく凍りついてしまいました。

何かあつたとしたら、少なくとも身柄引受人の松岡由香子さんのところには連絡がいくはずです。それが私の耳に入らない訳はありません。

「それは本当ですか？ いつのことですか？」

と尋ねると、

「さあ、はつきりとは分からぬけど一週間ぐらい前から病院に行つてゐるはずで、とにかくここ（刑務所）にはいないはずですよ。

私たちも正式に教えてもらつたわけではなくて、ホワイトボードか何かに書いてあるのを見ただけだから、何とも言え

ないけど……

とのこと。早速、松岡さんに電話をし、岐阜刑と同時に唯一の親族である姪御さんに確認をしてもらいました。その連絡を待つ間、念のため面会申請をしたところ、所内から刑務官が来て言うのには、

「現在、その人物（泉水さん）は、当刑務所には在籍していないので、面会はできません。私から言えることは以上です」

と、以前の面会禁止の時と同じようにひどい対応でした。

「亡くなつたと聞いたのですが」と尋ねると、

「誰から聞いたのか？」

と逆に質問してきます。

「ああ、受付で聞いたのね」

という感じで、足早に去つていきます。

最初から、宣言文を一方的に朗読し、あたかも対話を拒否するような態度でした。

私が、

「いま、身柄引受人（松岡さん）が電話でも問い合わせてくれていますが」と言つても、

「私から話せるのは以上です」とだけ言い、構内に帰つていきました。

その間に松岡さんから結果の連絡が来ました。姪御さんか

ら手短に返信があり、泉水さんが亡くなつたのは間違いないようです。

#### 姪御さんのお話

後で分かつたことも含め、姪御さんの説明です。

「三月二二日の夜、（岐阜刑）統轄の本田さんから連絡が入り、それまで元気だったのに、心肺停止になり、大学病院に搬送した。

ほかの付き添つた人がきて、心肺停止からは回復したが、脳死の状態である。今後どうするか、病院の先生が身内の人と相談したい、ということだつた。近くの県に息子（姪御さんの）がいるから、息子と連絡をとつて、行つてもらつた。本田さんと息子さんが話し合つて、長いこと刑務所に入つていて脳死の状態で生かしておくのは可哀想だ、ということで延命処置はしなかつた。二七日（金）の夜、九時何分かに、亡くなつたという連絡が入つた。翌日は土曜で市役所はやつていないので段取りがつかない、ということで、三〇日の二時に火葬ということになつた」

姪御さんは、泉水さんのお兄さんの娘にあたります。お兄さんはすでに逝去されていて、そのご遺骨を救援連絡センターの山中幸男さんが探し当て、東京の鷺谷にあるお寺で保管しています。

泉水さんがダッカ事件で出国する以前、お兄さんの奥さん

が、まだ幼い姪御さんを連れて泉水さんの面会に幾度か來たそうです。

泉水さんにとって、唯一の肉親であり、愛着も深かつたのでしよう。一〇〇六年頃から私たちが面会に行くようになつた時、最初に依頼されたのも、この姪御さんの住所が知りたいということでした。

かなり長い間、音信不通になつていたのです。支援者の一人が弁護士さんを通じて調べてくださり、その後、泉水さんと姪御さんは何度か手紙のやり取りをし、さらに身柄引受人の松岡さんの段取りで、実際に一度だけ岐阜刑の面会にも行つています。

#### 刑務所側の情報開示は？

ただ残念なことに、私たち泉水さんを支える仲間と彼女との間に充分な信頼関係を築くことができず、泉水さんが亡くなつたことについても、私たちに知らせてはもらえませんでした。

また、泉水さんの遺骨を支援者で引き取りたいと考えたのですが、姪御さんたち一家は、刑務所の方で火葬して埋葬することに同意したため、非親族である私たちは手の出しようがないまま今に至つています。

泉水さんの体調が急変し、病院に運ばれ、脳死状態になりました。その後亡くなつたというのは事実かもしれません。

しかし、刑務所のガードは本当にかたく、親族ではない私

#### 泉水さんとのつきあいの始まり

これまでの泉水さんとのつきあいを振り返りたいと思いま

す。

私が最初に泉水さんの面会に行つたのは一〇〇六年の暮れのことであつたと記憶しています。初めて会つた泉水さんの印象は、小柄な体をキビキビと動かし、歯切れの良い一昔前の東京弁を話す折り目正しい人、というものでした。私は泉水さんのいたゞらつ子のような笑顔や時に見せる含羞<sup>がんしゅう</sup>が好きでした。

面会はやがて定期的なものとなり、毎月必ず一回は岐阜刑務所に行くのが私の習慣になつていきました。泉水さんの窮状を訴える水田ふうさんをはじめ、多くの応援団と共に私は泉水さんとの友情をはぐくんで来ました。

無期刑の人が仮釈放されることがどれほど難しいか、ましてや泉水さんのように旅券法違反の有期刑二年を重ねもつ人

追悼 泉水博さん——舟橋寛延

にとつて、刑の執行順序の変更がなされないと絶望的であることを知るに至り、その実現に向けて弁護士さんに相談したり、各方面の人々と連絡を取つたりする日々でした。

#### 交通権回復のための共同訴訟、順変義務付け請求訴訟へ

ところが二〇一〇年の秋、岐阜刑務所は突然面会の不許可を連発はじめました。

これは泉水さんを特別にねらつたものではなく、全体の面会者が増えすぎたことなど管理上の理由でありましたが、新しい施設収容法の趣旨を大きく逸脱した刑務所運営であつたことは間違ひありません。

泉水さんと共に獄外の仲間が共同原告になり、面会権を求める国賠訴訟を起こし、一審の岐阜地裁で部分的勝利、二審の名古屋高裁では一部をのぞきほぼ全面勝利に近い判決を得ることができたことは皆さんご承知のことだと思います。

国賠訴訟で原告が勝てることはあまりないと聞いています。獄中で裁判を起こすと扱いが不利になることも恐れず訴訟に踏み切つた泉水さん、手弁当で応援下さった安田好弘弁護士、山下幸夫弁護士、そして、いつも傍聴席の一つひとつを埋めて下さった皆さんに今も感謝しています。

手もとに泉水さんが刑務所内で書いた「反省文」（平成22年5月20日付）のコピーがあります。上から、現在の心境について、事件に対する反省について、被害者等に対するどのようになっているのか、と設問がならんでいますが、最後の「出所後の生活について」という問いに、泉水さんは次のように記述しています。

「私の身体が動く限り、働き続けたいです。未だその職業は具体的に決まっていませんが、固より職業の選り好みなど云つてはいる資格はありません。幸いに、身元引受人、ご支援者の方々に恵まれ、その方々の協力を得られる関係にありますので、先ず生活の基盤を確りと整えていきます。その後、私自身の社会での順応をみて、他人との接触を厭わない自分なので、将来的には接客営業関係の仕事をしてみたいと思つています。そして次に、でき得る限り早い時期にフィリピンから妻を呼び寄せて一緒に生活を始める予定です。引受人の下での奉仕活動にも積極的に参加したいと思っています。」

また、この一〇年ほどの交通権訴訟の取り組みを通じた多くの方々の応援は、泉水さんにとって救いになつたと思いま

にはいつまでたつても仮釈放の対象にならないという事実は全く変わりません。

このための裁判もこの数年闘つてきましたが、昨年一審に続ぎ二審の名古屋高裁でも敗訴し、最高裁に上告中の中、突然泉水さんは私たちのもとを去つてしましました。

泉水さんと共に歩んできた十数年間、成果もありました  
が、成し遂げられなかつたことの方がはるかに多いです。何  
より、あれほど出所したかつた泉水さんの願いをかなえられ  
なかつたことは残念という言葉では到底表せません。

泉水さんに幸せな時はあつただろか？

泉水さんが亡くなつたことを私が自分の母に告げた時、「泉水さんは、幸せな時があつたのだろうか？」

若い時は仕事を転々として苦労し、強盗殺人の共犯として無期刑に処され、千葉刑務所、旭川刑務所を経て、ダツカ事件で出国、その後、中東地域からフィリピンに移動して拘束され、一九九五年からは岐阜刑務所でずっと過ごした泉水さん。

中東時代やフィリピン時代のことはあまり多く聞いたことがありません。敢えて聞かなかつたこともあります。

フィリピンで一緒になつたロウルデス・カニエテさんには毎年一～二回、送金したり手紙をやり取りしていました。泉水さんはゆい気持ちもあつたでしょう。嬉しさよりも申し訳なさを感じる性格だったとも思います。しかし、たくさん的人が泉水さんのことときにかけ、傍聴につめかけ、面会し、手紙や差し入れをしました。息が詰まる刑務所生活の中で、そういうつた一つひとつは「幸福」までいかなくともホッとできる機会であつたと信じます。

#### 泉水さんから学んだこと

泉水さんとの付き合いで学んだことは数多くあります。たとえ周囲と摩擦を生じようとも自分が信じる倫理に従つて行動すること。

事を起こすについて損得を考えないこと。とつた行動の責任は自分が負うこと。

言い訳をしないこと。

昨今あまり見られなくなつた人間の生き方、規範を示してくれたと思います。

泉水さんは、時々手紙の中で私のことを「寛さん」と書いてくれました。そして自分のことを「じい」と呼んでくれとも。

でも私は何だか恥ずかしくて、いつも「泉水さん」と呼びかけていました。いつか泉水さんが出所して、私の子どもたちと遊んでもらえる日が来たら、その時にでも子どもの前で「泉水爺さん」と呼べるかなと夢想していましたが、かなわぬこととなり果てました。

三月一六日の最後の面会の時、後のことは考へず喧嘩仲裁に飛び出したことについて、私は思わず、「なんというか、泉水さんらしいですよね」と言つたところ、泉水さんも苦笑いをして頭を搔いていました。最後の面会になつたあの場面で、ほんのひと時、笑いが生まれたのは本当によかったです。

刑務官が同席し会話を聞いていた状況のもと、私のあの言葉は泉水さんの生き方、人柄を賞賛する含意があり、それは泉水さんにも通じていたはずです。

泉水さん！ 泉水さんの人生の最後尾を伴走できて私は幸せでした。ありがとうございました。  
もし冥界で会えることがあつたら、まだお話をたくさん」ましうね。今度はアクリルの板越しではなく。

2020.5.7

## 追記

この文章を書いてから、あつとこらう間に半年以上が経ちました。いまは二〇二一年の一月です。コロナ感染は私たちの生活を大きく変えてしまい、日々振り回される中、泉水さんのことを探慕することができないのも現実です。毎月通っていた岐阜刑務所への道も久しく通つていません。私の家は岐阜市の中心部にあります。市街地を北西に抜け、岐阜大学のあたりを西へ曲がり、途中北へと道をたどつ

た先の田園風景の中に岐阜刑務所はあります。今は頭の中で道筋をたどるだけです。かつて同乗して一緒に面会した由井滋神父（最初の身柄引受人）、そして、ふうせんももういません。みんなこの世を去つてしましました。

いま自分の中に残つている気持ちをかえりみると、刑務所の処遇や検察のやり方への怒りよりも、泉水さんの不在のほうがこたえています。無念であつたろうな、少しでも婆婆の空気を吸わせてあげたかつたな、でも泉水さんはもう今生にいないんだ、と。

先日、TBSの「報道特集」という番組で無期刑の特集を

していました。三〇年以上も獄中にいて、あるかないか分からぬ仮釈放に一縷の望みをかけている人びとの肉声が語られていました。

また、八〇代半ばでようやく仮釈放がかない、その後約半年でこの世を去つた男性のことを触れられていきました。刑務所にいる間に貯めた報奨金1100万円ほどを葬式費用に、と残していたとのことです。番組を見ながら泉水さんのことを考えます。

泉水さんも八〇代でした。仮釈放が実現する可能性は低かったでしょう。しかし泉水さんが元気で生きていて、共に歩む仲間が社会で見守つている限り、その可能性はゼロではありませんでした。いまとなつては永遠にその機会は失われてしまいまして。ただただ寂しく、空しい気持ちです。

## 泉水博さんの 訃報に接して

博兄

やよみ

「ことです。最後まで諦めず生き抜く」とができたのは、その人の存在が大きいと感謝しています。

女性の私に対してとは違う、打ちつけた冗談まじりのおしゃべりと、生来のぐらんめえ口調を楽しんだことでしょ。

私は、一人座す男の孤独な後ろ姿を思つて手紙を出しました。

「やられてしまわない」を胸に

大嶽恵子

今私は、オリーブの木陰に座り、アラブの風に吹かれながら楽しく語らう父子の姿を夢見ています。

最後まであからぬずに

初めて会つた時から最後までずっと、二コニコ笑顔と礼儀正しさを崩すことはありませんでした。何となく他人行儀な気がして、手紙のやり取りをする方が好きでした。

活動世界に馴染めず戸惑う私に「オレもそうだ」とアドバイスしてくれました。

一番嬉しかったのは、自由への希望を与えて支えあつた息子のような人がいてくれた

博兄

やよみ

谷丸祥子

泉水さんがもういないなんて、いまだに嘘のようです。

私は輪廻転生を信じていますが、来世の泉水さんにはどうか、自由に歌をうたう、自由に酒を酌み交わし、自由に友と語らい、自由に世界を旅する、そんな人生を

送つてほしいと切に願つています。

活動世界に馴染めず戸惑う私に「オレもそうだ」とアドバイスしてくれました。

一番嬉しかったのは、自由への希望を与えて支えあつた息子のような人がいてくれた

印象に強く残るのは一〇月五日の交通権判決。誰に何万円支払え、誰にはン万円支払えという判決文に何のことかわからず、終了後の報告会で説明を聞いてこんなことがあるのかと驚いた。

また何回目かは法廷を間違え、急いで駆けつけたが裁判は終了していた。報告会場へ行くとみなさん遠方からいらしていて、歩いてでも行ける距離に住んでいながら申し訳なく、雑務があればお手伝いをと思うばかりで役に立てず。帰り道でふうさんが「ボケてきた」というのでわたしもと笑いあつて……その後容態進行。二〇一九年一〇月二二日の順変結審には泉水さんを解放してほしいという願いとふうさんを心配した人たちが全国から傍聴に駆けつけたのだが、敗訴。二月一五日付で泉水さんは「やられてもやられてもやられてしまわない」と控訴し、逆に元気づけられたのだ。

まさかその一年後一月一六日にふうさんが、そして三月二七日に泉水さんが亡くなってしまうとは……。

「やられてしまわない」を大切に、膨張させていきたい。

## 泉水国賠に関わつて

### うめはら

水田ふうさんと泉水博さんの冥福をお祈りしています。

泉水さんは、義の人であつたと思っています。日本赤軍とは関係が無かつたのに、ダッカ事件で人質を守るために、超法規的処置によつて釈放、日本赤軍と合流、活動をし、一九八八年逮捕されたわけです。人のためにという思いがあつたのに、通刑と言われ、泉水さんはとても不本意な思いをされたと思います。

気になつたのが、泉水さんの優遇処置の種別が、そろそろ緩和される頃と思う時期

に、思わぬトラブルに巻き込まれたり、誤解されたりで、下げられてしまつたことが複数回あり、職員にいやがらせされているのでは? と思うほど懲罰があつたこと。

順変の裁判での、期待と落胆のストレスを考えると、本当に無念だつただろうと思ひます。

## あまりにも残忍な……

### 早川しょう一

泉水さんの死を知つて驚きました。その後、死因がほとんどわからず、自死だつた可能性もあるのではないか、とさえ思いました。過酷な獄中で生き延びる気力を、水田ふうさんを喪つたことや、自身の老いなどでなくしてしまつたのではと思い、その絶望の深さを想像すると、胸がしばらく痛みました。

それでも、この国のあまりにも残忍な仕打ちに「クソ!」と吐き捨てました。これは、國を支えている、大多数の人たちに、「少しでも」と立ち向かう氣力さえもなくしてしまつてゐる自身に対し、でもありました。

水田ふうさんに誘われて泉水さんの国賠に閑わりました。閑わつてみてしつかりとわかつたのは、この国の底流にある「お上に逆らつたものは絶対許さん」という前時代的な冷酷で残忍な政治思想。人として見過ごすことができないので、お上に逆らつて

てしまつたのは、人としてのりっぱな道理のはずであつて、それを絶対に許さないのは大問題です。

岐阜裁判所に傍聴に行くときは、近くの

お蕎麦屋さんで冷やし狸のダブルを食べるのがいつものコースでした。その楽しみよりもっとステキなことは、東京や大阪など遠くからたつた五分で終わつてしまつ裁判の傍聴に駆けつける人たちに会えることでした。時間を割いて自腹を切つて（見た目はみんな裕福そうではありません、これは失礼ごめんなさい!）でも、五分だけでも役に立つかもしないと思える人は、今や絶滅危惧種です。さらに二人の弁護士さんは、敬服してやみませんでした。

ですから、傍聴は私にとつて楽しみを通り越して「まだこの国には少なくともこれだけの人たちは存在している」と、希望となつていつたのです。

今はコロナ災禍の真っ最中。

大規模な自然破壊や格差の拡大など、人としての道理を捨ててしまつたことが招いた、人災だと代思つています。

だけの人たちは存在している」と、希望となりつたのです。

今はコロナ災禍の真っ最中。大規模な自然破壊や格差の拡大など、人としての道理を捨ててしまつたことが招いた、人災だと

今後ともよろしくお願ひします。

## 猫が雪の中を歩いている絵

### 白澤吉利

私は、自分のためにも、この活動に関わった事をとても有意義に思つてゐます。先に亡くなられた由井神父。舟橋さん、中島さん、安田弁護士、山下弁護士をはじめ、皆さんみな素晴らしい人と関われた事に感謝しています。

私は、日本の法を含めた刑務所制度や、

お蕎麦屋さんで冷やし狸のダブルを食べる

のがいつものコースでした。その楽しみよ

りもっとステキなことは、東京や大阪など

遠くからたつた五分で終わつてしまつ裁判

の傍聴に駆けつける人たちに会えること

でした。時間を割いて自腹を切つて（見た目

はみんな裕福そうではありません、これは失礼ごめんなさい!）でも、五分だけでも

役に立つかもしないと思える人は、今や

絶滅危惧種です。さらに二人の弁護士さんは、敬服してやみませんでした。

ですから、傍聴は私にとつて楽しみを通じて「まだこの国には少なくともこれだけの人たちは存在している」と、希望となつていつたのです。

今はコロナ災禍の真っ最中。

大規模な自然破壊や格差の拡大など、人としての道理を捨ててしまつたことが招いた、人災だと

今後ともよろしくお願ひします。

だけの人たちは存在している」と、希望となつていつたのです。

今はコロナ災禍の真っ最中。

思い出していたのですが、原稿の〆切がもうすぐなんだという話を川仁俊恵さんにしたら、「だいぶ前にふうちゃんから来た手紙に『川仁さんから送つてもらつた絵葉書を泉水さんに送つたら、その絵葉書の絵を見て、真夏の暑さをしのいでいますと、言つてた』というの、思い出した。いい手紙だつたから何処かにしまつてあるはずなんだけど」と、探し始めてくれたが、その話であつと、思い出した。

その絵葉書は俊恵さんの描いた、猫が雪の中を歩いている絵だつたのだ。刑務所内の夏の暑さ、冬の寒さの厳しさは半端ではなかつたことは「国賠つうしん」からも知らされていた。真夏の最中、茹だるような房内で泉水さんが小さな絵葉書を見凝めている姿を想い、なんとも複雑な感慨がありました。川仁俊恵さんも支援者で、泉水さんと直接のやりとりはなかつたのですが、私の話よりよっぽど泉水さんの気持ちが通じる良い思い出なので、本人の了承を得てここに書くことにしました。

泉水さんの遺骨すら外に出してあげられない無念さを忘れない。

## 傍聴に通つて

### 田村スマコ

なわないことで懲罰を受けて仮釈放への道が遠くなることなどを知つて、びっくり仰天するばかりだつた。

泉水さんの名前を初めて目にしたのは、忘れもない、一九八八年一月二十九日に我が家に初めての家宅捜索が来たときの捜索令状に書かれていたものだつた。「泉水博旅券法違反」。名前も知らないし、身に覚えもない。ふうさんに電話したら、「あんたどこもか」。なんと同日にふうさん宅、中津の松下竜一さん宅、奄美大島の無利貸道場にも。あとで知つたが、丸岡修さんの件もからんでの全国三〇〇ヶ所以上の大规模な家宅捜索があつたようだ。そのあと松下竜一さんの本を読んで、少し泉水さんのことが分かつたが、それつきりの「縁かと思つていたのに、ふうさんが泉水さんに面会するようになつてから、すつかり身近な人になつた。

それまでは私は大道寺将司くんら政治犯の監獄生活しか知らなかつた。それがふうさんの口から、または通信から、政治犯と刑事犯ではえらく待遇が違うこと、理にか

だつたろう。

ふうさんが力尽きて逝つてしまつてから、あとを追うように亡くなつてしまつた泉水さん。生涯の最後、仮釈放で帰の外に出ることが悲願だつた泉水さん。でも、刑務所は意地のように、亡骸になつても泉水さんを外に出そとしなかつた。非道い結果だつた。

## 泉水博さんへの社会復帰を認めなかつた日本社会

ここにあるのは、充分に社会参加できた、しようとした泉水さんの悔しさを込めた言葉だ――

最近の泉水さんの様子を、文面を通して伝えることができればと思う。

少しでも、泉水さんの生の声を感じてもらえるでしょうか。

\*

●――一〇一七年一〇月

「この度の外部交通（面会・文通）訴訟の勝訴確定を転機に、避け続けた運気までも引き寄せたい気分で、この状況を持続させたい心境です。」

「投げ出さないだけが、取り柄の自分は、頑張っています。頑張ります。」

●――一〇一八年二月

「二月二三日（金）は矯正（処遇日）指導の日として、免業日ですが、休日ではな

や、クラブ活動等が行われます。宗教所の行事としては、春・秋の彼岸法要、クリスマス、お盆等。教誨は集団・個人が行われ

ます。

これら以外も宗教上の儀式行事、教誨

く、时限は起床七時四〇分、点検七時五〇分、朝食八時は休日同様、平日より一時間遅れの実施となります。

録音教材聽講八時四五分、室内体操九時四五分、教養VTR視聴一〇時、自己改善ワークブック一〇時五〇分、昼食休憩一二時、そして午後も、ワークブック記載一三時、ストレッチ室内体操一五時三〇分、夕点検一六時一〇分が基本となり、この矯正指導は原則として毎月第二・四金曜日に実施されます。休日が重なつたり行事等の関係で変更になることがあります。

この矯正指導日は、改善指導（一般改善指導及び特別改善指導）及び教科指導で構成され、それらは居室内又は教室で行われます。

●――一〇一八年七月

「七月一〇日（金）の当所会議室を使っての義務付け訴訟の証人尋問、口頭弁論には、安田・山下両先生も来所、出廷で、無

ます。クラブ活動としては、短歌・川柳・書道・俳句・詩吟・落語その他です。

その他運動会、卓球、囲碁、将棋等の大集会、更に集会が、二類者集会、二・三類者集会とあります。これらが矯正指導日に、午前・午後の時間帯に行われるわけです。」「ところで、面会の時に話しましたが、この金曜日当日に、午前九時ごろから卓球大会が講堂で行われたのですが、卓球の方は残念ながら準決勝で敗退。今年も優勝はできませんでした。」

「今日二六日（月）に私の刑の順序変更に関する口頭弁論公判で、ふうさんを始め支援者の方々の傍聴出席で集り戴いているでしょう。頑張ります。」

泉水博士への社会復帰を認めなかった日本社会——松浦武夫

事滞りなく終わりました。本当に毎度お手数を煩わせました。暑い中を長時間にわたってお世話になり、唯々、感謝感謝の私でした。

「七月二十五日（水）には、ふうさんの面会をいただきました。何時も付き添つて下さっていた中島さんも、今回から許可となりお会いする事ができ、楽しいひと時を過ごさせていただきました。」

「処でこの間地震、そして大雨による被害等々報道がされていましたが、各地に大雨の被害があつたようですが、特に岡山、広島等では甚大な被害で、お亡くなりになつた方々の数も多く、自然の猛威をまたまた思い知らされた感と同時に、人災ともいえる面も少なくないという教訓を教えられた次第。尤も外野でごちやごちや言うだけで、何一つも復興のお役にたてない身を情けない思いで、唯、時を過ごす事のみの繰り返しが、私たちが災害時に思い知らされる状態でもあります。」

### ●——二〇一八年一月

「早速、カイロの購入を申し込みさせていたときました。もう朝晩はすっかり冷え込

んでいる。本音を隠し、懲役は人として思われていない。対応・結果が如何になつているかを日々実感させられています。

そこではおのずと人の情を期待することが間違いついた世界に向つていると感じます。相も変らぬ矛盾、矛盾だらけの日々、どの様に自分を「まかすか、だますか……いつまでもと、ならざるを得ないのでしょうか。

人間性までを失つて何が更生か、と。大そうな言い方ではなく、真面目に考えれば、そういった疑問・問題に行きつきます。真面目に考えること自体が間違いなのでしょうかね？

眼鏡の話からとんだ方向へと思われるでしょうが、例えば購入してくれるまでの間、作業にさしつかえるのでということで、当局から老眼鏡を一ヶ月程貸与してもらつて作業に当たつていたのです。今回も不具合でまた貸与を願い出たのですが、領置金があつて眼鏡購入の申し込みの者には貸与しない旨の返答があつて、いまは以前の弱い度数の眼鏡を使って、不自由しながら作業に就いています。

当然、能率が落ちることはわかっている

みがきつくなつてきました。」

「現在も第三工場（洋裁工場）でミシン裁縫作業に就いています。ツナギの作業衣づくりです。現在三〇人で七、八年前の五〇

名位の就業人員から減つた状況です。」

当所の全収容人員も一〇年前の半分以上も減つて、六〇〇名を切つてから一年が過ぎました。居室はまだ一階の共同室（雑居室）でいまは四人です。南側なのでこの時期は陽が室内まで入るので、暖かいので助かります。

その同僚一人が来月初旬に満期釈放になりました。明朝釈放前教育で移室となるので、三人になります。来月に入つて若し出役者が来た場合には、私が単独室に（独居）移室する予定となっています。

単独室は当分の間は北側で寒さは厳しいですが、共同室のような対人的な気疲れがなくなる分、精神的に大変楽になるので助かる面があります。新年からはその単独室で過ごすことができる予定です。

その寒さは半端じやないです……」

### ●——二〇一九年四月

「今年は此処例年にはない程、風邪・インフルエンザ

危険度においてだつて、今回の縫製時でないのにミシンのペダルに足をのせていました。

ことによる懲罰対象となつたことより、危険度は高いと云えるでしょう。しかも貸与理由が前回の状況と変わらないにも拘わらず、今回はダメ、何がどうなつてているのか、さっぱり分からぬ。いい加減にしてくれ！とも云えない懲役の立場を百も承知の上で、強引に押し切られ、これはもうイジメもあります。作業管理に当たる作業課、処遇部に、やつてのことと、「云うこと」が違う。矛盾を承知の上での、場当たり的対応を好き勝手にやられ、懲役の実態の一つを知つてほしくて書いてしまいました。一事が万事だから始末が悪いのです。

ミシンの踏み板の件での、作業安全衛生違反の懲罰に、戒告懲罰となりました。一年無事故も消滅、更には次の九月からは、この前の月間生活評価点減の為に、また3類から降下となりました。期待に応えられぬ結果となり申し訳ありません。めげずに、また一からの出直しに努めていく所存です。」

泉水さんが超法規措置で獄外に出向いたのは、日航機の乗客との交換の為で、その報復のような無期の拘束は、社会で生きれる人を国家は葬つた。人を死刑でなくとも葬ることができる。私はそのように記憶している。

ルエンザにも罹らず、持病の喘息・痔病も起ることなく、高血圧までもその数値が落ち着き、一日として寝込むことがなかつたです。」

「処で私については、今月八日付で、優遇区分が（第1類～第5類）第5類から第3類と進類評価を受けました。発信が月五通まで、面会が三回まで許可となります。他には甘味品が月一回食べられます。やつと普通（評価点）の懲役並みとなつた次第。」

### ●——二〇一九年五月

「ところで眼鏡の件ですが、先週も未だ連絡なしで、工場担当に伺い、処遇係の方に問い合わせてもらつた処、三月中の分がやつと終わつた処で、もう少しなので……

ということでした。私は四月の初旬の申し込みなので、あと一、二週間待つてみます。それから検査に入るわけですから、六月中旬頃には、手元に届くと思います。ご心配をかけます。済みません。」

愚痴つてみても仕方ないので止めますが、昔、千葉刑時代の四〇年前頃に比べても、社会の様変わりに比例ほどではなくても、現在の状況はどんどん官僚的・化が進んでいます。

\* \*

日本の刑罰は應報主義をむき出しにしていた。面会も長く自由に認められなかつた。

私は二〇二一年の初頭に、岐阜刑務所に泉水さんの納骨場所を、岐阜刑務所で祀つてあるならば教えてほしいと電話で問い合わせた。これまで泉水さんと面会をしていたことや、こちらの素性も名乗つてのものだつた。

三人目に対応に出た庶務課職員が、「そのような問い合わせには答えられない」と言う。手を合わせたいだけであり、どの刑務所も獄中で亡くなつたら、知人・友人にもまいられる事が叶わないのか聞いたが、他の所はわからないが岐阜刑務所は問い合わせに応じないという。それは岐阜刑務所としての判断だとする。

泉水さんが超法規措置で獄外に出向いたのは、日航機の乗客との交換の為で、その報復のような無期の拘束は、社会で生きれる人を国家は葬つた。人を死刑でなくとも葬ることができる。私はそのように記憶している。

編集局

特別報道部

4月9日

ある無期囚の死

先月下旬、感染症禍の記事で埋まつた紙面の隅に計報があつた。岐阜刑務所で服役中だった旧日本赤軍の一員、泉水博愛刑者が死亡した。面識はない。その半生は故松下龍一氏の作品「怒りつい、逃亡には非ず」に詳しい。かつてまむどうなる。横浜の貧困家庭で生まれ、二十二歳で強盗殺人事件に関与。無期懲役の判決を受け、千葉刑務所に下獄した。約四年後、模範囚で仮釈放目前だったが、吐血した重症の受刑者を放つておけず、彼の入院を要求して看守を襲い、旭川刑務所に移送された。

# 「順変」の望み 果たせず

だが、八八年にフィリピンに潜伏中、同国当局に捕まつて日本に強制送還。新たに旅券法違反で懲役二年の判決を受け、先の無期懲役と併せて岐阜刑務所で服役していた。世間からは過去の人と見なされていたと思う。ただ、私は彼が原告になつた一つの裁判に注目していた。一〇一六年に提訴された「順変」義務付け請求訴訟である。

あるとみられる。通達は「非公開だが、重大事件はたとえ無期刑でも「終身刑」扱いにせよ」という内容だという。

そこには煮え湯をのまされた日本赤軍に対する國家権力の「報復」の意思が透ける。昨年一月に名古屋屋地裁で一審判決が出た。敗訴だった。

自らが抱く義と法はときに矛盾する。どちらの取るかは人次第だが、故人の評価まで法に縛られるいわれはない。

「審も敗訴し、上訴したが、献身的に支援してきた女性アナキスト(セミ)が今年一月に病死した。その翌月の泉永受刑者の死、後を追つたようにも映る。(特報部長・田原牧)

「東京新聞」2020年4月9日、朝刊

# 泉水国賠の経過

## 交通権回復のための共同訴訟

東水さんとの面会の追跡を才媛と川添の妻孫代に訴訟、二つの裁判の経過を振り返つてみることにします。

一九〇〇七年に今までの監獄法が廃止され、「刑事収容施設」となり、従来、判決確定後は原則として親族、弁護士以外は面会出来なかつたのが、友人・知人関係でも面会が出来るようになりました。

用した違法なものであると、一〇一年に面会・通信の交通権を求めて国家賠償訴訟を起こしました。

二〇一六年三月岐阜地裁の判決では、面会が許可されていたのは前の所長が「法」を誤って運用したものだとした上

「順変」の全の本意  
仲間らの釈放を求めてハイジ・ヤック（日航ダッカ）事件を起す。政府は超法規措置で六人を釈放し、泉水受刑者もその中に含まれていた。喜んで出獄したわけではない。当局に「自分で判断せよ」と突き放され、「一人でも（人質に）犠牲が出たら後悔するの私は」と考えた結果だった。

だが、八八年にフィリピンに潜伏中、同国当局に捕まつて日本に強制送還。新たに旅券法違反で懲役二年の判決を受け、先の無期懲役と併せて岐阜刑務所で服役していた。世間からは過去の人と見なされていたと思う。ただ、私は彼が原告になつた一つの裁判に注目していた。一〇一六年に提訴された「順変」義務付け請求訴訟である。

しかし他の原告の請求は却下され、なおかつ刑事収容施設の逸脱として違法としました。

法では受刑者の権利について記されているのであって、外の面会申出者は受刑者の権利の「反射的権利」に過ぎないから違法性はないとされました。面会申出者の側でなく、受刑者側が面会を必要とする事情があると認められた場合に許可をする。要するに泉水さんは会う権利はあるが、外から面会が残っている。だから、仮釈放の審査も受けられない。

順変とは刑の執行順序を変えることである。泉水受刑者の場合、古い無期懲役が執行中で、その後に二年の懲役刑が残っている。だから、仮釈放についても、「継続的に培われてきた交際と、受刑者の改善更生を図る観点から健全で良好な相手」といつたように規定されています。却下された原告について一審判決では、「交友が継続的ではない」「受刑者と支援者の関係でしかない」「健全で良好とはいえない」との理由が付けられていました。

結局、一審判決では文通について二名の勝訴と、面会については原告のうち「継続的に培われてきた交際がある」と認められた二名のみに、泉水さんが会う権利があるとされたのでした。

実は一〇年に当時の岐阜刑務所長が約三十五年も服役していた同受刑者の仮釈放を考え、刑の執行を指揮する検察官護団によると、理由は一九九八年に最高検察庁が出した「マル特」無期事件通達にあるとみられる。通達は非公開だが、重大事件はたとえ無期刑でも「終身刑」扱いにせよという内容だという。

弁護団によると、「報復」の意思が透ける。昨年一月に名古屋地裁で一審判決が出た。敗訴だった。自分が抱く義と法はときに矛盾する。どちらを取るかは次第だが、故人の評価まで注ぐ連絡はない。

二審も敗訴し、上訴したが、献身的に支援してきた女性アナリスト（七三）が今年二月に病死した。その翌月の泉水受刑者の死、後を追つたようにも映る。（特報部長・田原牧）

訴えた原告は、この判決には納得できず控訴しました。

これに対し、二審の名古屋高裁では賠償額こそ減額されました。原告の主張を全面的といつて良いほど認めた判決がでました。その判決内容は、従来の監獄法は社会からの隔離であり面会などは恩恵的・制限的に認められていたにすぎず、その相手を原則として親族に限定していた。しかし今日では、親族だけでなく友人・知人が受刑者と社会との良好な関係の維持に重要な役割を果たしており、その者らとの外部交通は改善更生と円滑な社会復帰を促進するための重要な手段となると述べています。

刑事収容施設法は、社会関係を遮断する監獄法の考えを改め、広く外部交通が認められるようにすべきと規定しているところ、外部交通を積極的に認め交友関係の維持も通常の交友関係があれば足り、その長短や濃淡は問わないとして、受刑者の矯正処遇の適切な実施に支障を生ずるおそれがない限り、友人・知人との面会それ自体が改善更生と社会復帰に資するものであるから、刑事施設の長の裁量の幅は相当程度制限されるものと解されています。

そして「本件面会不許可処分は、原告安田佐知子（ふうぢやん）を除き、刑事収容施設法111条2項に関する岐阜刑務所長の裁量権の範囲を逸脱又は濫用したものであり、国賠法1条1項の適用上も違法な処分というべきである。」と述べています。

ふうぢやんのケースは、身分証明書を提示しなかつたので不許可にしたものであり、そこには裁量権の逸脱・濫用はない

懸念の域を出ないと、おおよそこの様な内容で実に真つ当な判決でした。被告・国側は上告をあきらめ確定しました。

## 「順変」義務付け請求訴訟 2016-2020

もうひとつ裁判、順変の「義務付け訴訟」は、泉水さんが受けた無期刑と旅券法違反2年の懲役刑の執行順を切り替えるよう訴えたものです。刑の順序を変更することから順変と言われています。

泉水さんは日本赤軍からの指名で、超法規的措置により出

所しアラブへ行く前は無期刑を務めていました。一九八八年、日本へ送還されその刑が続けて執行されました。それに加えフィリピンにいた時に関わった旅券法違反事件で、二年の懲役刑も受けたのです。無期刑より先に二年の懲役刑を終わらせないと、無期刑での仮釈放審査の対象になりません。たしかに刑訴法では「……重い刑を先にする」と書かれていますが、但し書きでは「検察官は、重い刑の執行を停止して、他の刑の執行をさせることができる」と規定されています。泉水さんは過去に順変を受けたことがあるのです。

二〇一〇年、当時の岐阜刑務所長はその順変の申請をしました。しかし東京高検の検事長がその申請を却下しました。この

とされました。一審判決も同様であり、一審では面会自体はそれまでの交流の実績から許可されるべきであつたと書かれています。ただこの身分証提示もそれ以前の面会では求められていませんでした。

一審で面会申出者には「反射的権利」しかないと、訳の分からぬ理屈を述べた判決については、「一般に人が、友人・知人と面会して会話を交わすことや、友人・知人とのコミュニケーションを通じてその関係性を維持・発展させる」とは、親族のいない者にとってはもちろん、親族のいる者にとっても、人生を豊かにする上で不可欠なものであるから、面会を申し出る者は、憲法13条により保障される幸福追求権又は同法21条の表現の自由の一内容として、受刑者との面会を求めるにつき固有の利益を有している。また、「交友関係の維持は、事柄の性質上、受刑者・面会申出者のいずれか一方だけの意向では成り立ち得ないものである。」と述べています。

そして被告・国側が、しつこいほどに泉水さんや原告の一部に対して指摘していた日本赤軍との関係についても、すでに解散しているのであり面会や文通があつたとしても、他の元メンバーと意思を通じるとか、刑事施設の規律や秩序を害したり、泉水さんの矯正処遇の実施に支障を生ずるおそれがあつたとは認められない。泉水さんもすでに七七歳（原審尋問時）の高齢であることからしても、被告の主張は抽象的なと述べています。

二〇一九年二月の一審判決では、「刑の執行順序変更の「義務付け」を求める裁判を起こしたのです。仮釈放が認められるための、その審査対象になるのは無期懲役者にとつては極めて重要なことと言えます。泉水さんは既に四五年以上に亘つて務めていたのです。

处分を不当として、検察官に對して刑の執行順序変更の「義務付け」を求める部分を却下」「原告の請求を棄却」と門前払いの敗訴でした。

その内容は、検事の行つた処分に對して不服があるなら、刑訴法で争うべきであり、「義務付け訴訟」は不適法であると。よつて順変されなかつたことへの国賠請求も理由がなく棄却ということでした。しかも、泉水さんの六〇年前の事件や日本赤軍との関係、懲罰があるなど、それをマイナス要因として順変によつて仮釈放の審査対象とするなど、もつてのほかといつているのです。「悔悟の情や更生の意欲の存在に疑惑を生じさせ、再び犯罪をするおそれをうかがわせる事情」ということができ……」とまで書いています。

判決は検察の「マル特無期通達」（一部の無期囚の終身刑化を目論む）に沿つて、裁判所がそれを認めるようなものでした。順変することと仮釈放の要件とは別である。仮釈を認めるか否かは、あくまでも地方更生保護委員会の権限であるにも関わらず、実質的に仮釈の判断まで検察官にあるように述べていて、まったく認めがたいものでした。

泉水さんと弁護団は控訴しました。

一審は、仮釈放の審査を受ける資格と仮釈が認められる資格を混同している。訴えたのは審査を受ける資格を問題にしたのであり、仮釈が認められるかに比して広く認められるべきである。入学試験に合格する者でなければ、受験もさせないというに等しいと。行政事件訴訟法には「一定の処分がされないことにより重大な損害が生ずるおそれがあり、かつ、その損害を避けるために他に適当な方法がないときに提起することができる」とある。泉水さんは既に四十年以上無期刑を受刑しているにも関わらず、「二年の有期刑が執行されないと」により、仮釈の審査を受けられない。このままでは事実上の終身刑となってしまう。検察官のあえて順変をしなかつたという処分（不作為）に対しての異議申し立てでは、順変をすることは出来ない。順変をしなければならないといふ「義務付け」が必要である。等々が控訴理由でした。

しかし一〇ヶ月後に行われた控訴審判決でも、「本件控訴を棄却」となりました。

内容はほぼ一審判決を踏襲したものであり、刑訴法の但し書きは「検察官が刑の執行順序の変更をし得る旨のみを定め、要件、時期等の判断は広く裁量に委ねられている。仮釈審理の事情も考慮の対象になると解される……」と記されています。

弁護士さんの意見として、義務付け訴訟は、行政のやつている」と（今回の場合、検察官処分）に対して、「違法だか

ら、」のようにならない」ということで、刑の執行のあり方など検察領域に首を突っ込まれることになるので、抵抗も激しく難しい裁判であつたということでした。  
この判決のあと、泉水さん本人が検察に対し順変の申し立てをする。支援する仲間たちが「請願書」を集め、請願行動として検察、刑務所に提出するといった計画をたてています。  
しかし二〇二〇年の三月二七日、泉水さんが亡くなってしまった。順変を果たせず仮釈放の望みも見えない中、さぞかし無念であったことと思います。そして亡くなつた後にありました。七月一六日には紙ペラ一枚の最高裁の上告棄却判決がでました。

最後に多忙な中、この二つの裁判を闘つて下さった安田好弘弁護士、山下幸夫弁護士にはただただ感謝のみです。ありがとうございました。

2021.1.31

## 獄窓から 2019.5.5-2020.3.4

### 泉水博

泉水博さんが亡くなる前、最後の約一ヶ月の間に届いた書簡の一部、一一通をここに掲載します。全文ではなく、抄出であることをはじめにお断りしておきます。

岐阜刑務所の中で、泉水さんにいつたい何が起きていたか？ その一〇ヶ月間の心境や体調について、泉水さん本人の文章を補う意味もあると考え、書簡発信前後の面会記録を添えました。

2019.5.5 水田ふう宛

ふうさん、お便りどうもありがとうございます。いちょうが悪いのに、無理させてしまったみたいでごめんなさい。長いれんきゅうに入つてしまつて、返信が遅くなつてしまつません。

その後、具合はどうですか？

お見舞い申し上げます。無理はしないよう。私は元気です。すでに知つていると

思います。が、四月から三月にむづつて、今月中で一年無事故です。がんばります。ふうさんは、私の面会など考えないで、いまは体をなおすこと丈を考えて下さい。もちろん面会はうれしいですが、ふうさんの体調がもどつて、元気になつてくれる方が私ももうとうれしいです。ありがたいです。

一日も早く良くなるよう祈っています。私の祈りは、困つた時の神だのみで申しあげないですが、他にたよるものがない私です。ごめんね。とにかく、一生けんめい、しんけんに祈りつづけています。

お医者からはリハビリ的なこと、たいへりようほう的なこと、いろいろ言われているでしよう。友人、まわりの人たちからも……。

私の方は、まつたく心配はないです。丈夫です。ふうさんは、体をなおすこと丈に集中して、取り組んでください。くれぐれもお願ひします。

そして、体の調子しだいで、体を動かすことをしてくださいね。近所への散歩なども是非してください。もちろん無理はきんもつです。暖かい時間にね。寝つきりにいるのは一番良くないです。足、腰はかるい動き、運動の中できたらえられます。けつし

根気とのしようぶです。短期は損氣だよ。とにかく、あせつたら負けです。けつし

お見舞い申し上げます。無理はしないよ

うに。私は元気です。すでに知つていると

根気とのしようぶです。短期は損氣だよ。

とにかく、あせつたら負けです。けつし

お見舞い申し上げます。無理はしないよ

うに。私は元

## 面会記 ①

2019.5.14

12時半、岐阜刑務所着。犬山も朝からすさまじい雷と雨でしたが、大粒の雨が風にまじるなかで面会の手続きを終え、ほどなくして呼ばれました。13時を少し回った頃、泉水さんは白の丸首シャツの上に緑の作業服、髪を短く刈ったばかりのさっぱりした姿であらわれました。

現在も独居。膝が多少痛むが体調は問題ありませんと語る顔色もよく、表情もやわらかでした。

ただ、業者に注文したメガネが未だに手もとに届かず。ひと月以上待たされて困っているようです。その前に差し入れたJINSの新しいメガネは鼻からずり落ちてしまい使い物にならず。結局、以前のメガネをそのまま使用しているとのこと。

今回のいちばんの問題は、再度、懲罰になるかもしれない「規則違反」があったという報告。ミシン作業中、縫わないときは足をペダルからおろしておかなければならぬが、それをうつかり載せたままだった、とのこと。

これを杓子定規に問題化するのはあんまりではないか? と、泉水さんも意見を伝え、聞いてくれたそうですが、「規則は規則だから」と返された模様。最悪、懲罰、1年間の無事故がなくなるかもしれません。

以前の同僚との静いに端を発する問題のときにあつたような精神的な苦しみはなさそうでしたが、がっかりしていないはずがありません。あまり表情に出さないようにしているようでしたが、若干あきらめの気分も感じました。

ようやく3類となり、面会も月3回に。自分の座布団を持てたり、生花、TV・ビデオ視聴の機会が増えたのに。また4類に落とされてしまうのですか? とは聞けず。現在岐阜刑務所には500人ほどの懲役が収容されているが、一類はたった4、5人。かつて、級で分類されていた頃、その10倍の人数が1級だった、とのことです。

面会の時間の最後、泉水さんはいつも別れ際にひと言残して、扉の向こうへ行きます。3月の面会時は、「これから誕生会だから……」というもので、ショークリームと珈琲が出たそうです。

今回は、祈るような目をこちらに向けて、「ふうさんにくれぐれも大事にと伝えてください」と言いました。(N)

手にして、またそばにおいて読むようにして、たましいと思います。面倒がらずには。そういうことはすでにつけたやつていることでしょうが、ふうさんのことだから……いろいろときよみあること、めてることをさがすこと、取り組んでみることも必要だと思います。

さくおくのおどろえなど、歳をとつたらだれでもあること、気にやまないことです。しんこくならないことです。気楽に考えるようにしようよ。

ひとりだと思つてかんたんに言うなど叱られるかもしないけど……。けつこう私でも気にしだしたらいくらでも持ち合わせているもんです。それをほつといっている訳ではないけど、しいて、気にやまないようしているのが本当です。まにかく気にしていたらきりがないばかりか、問題解決に手をつけないで先送りにすることも沢山あります。また追々書くことにするけど、とにかく、のん気な奴だと言われるだろうことを多くかかえているのが事実です。

ふうさんもその位とは言わないけど、しだしたらきりがないばかりか、問題解決に手をつけないで先送りにすることも沢山あります。また追々書くことにするけど、とにかく、のん気な奴だと言われるだろうことを多くかかえているのが事実です。

ひとりだと思つてかんたんに言うなど叱られるかもしないけど……。けつこう私でも気にしだしたらいくらでも持ち合わせているもんです。それをほつといっている訳ではないけど、しいて、気にやまないようしているのが本当です。まにかく気にしていたらきりがないばかりか、問題解決に手をつけないで先送りにすることも沢山あります。また追々書くことにするけど、とにかく、のん気な奴だと言われるだろうことを多くかかえているのが事実です。

ひとりだと思つてかんたんに言うなど叱られるかもしないけど……。けつこう私でも気にしだしたらいくらでも持ち合わせているもんです。それをほつといっている訳ではないけど、しいて、気にやまないようしているのが本当です。まにかく気にしていたらきりがないばかりか、問題解決に手をつけないで先送りにすることも沢山あります。また追々書くことにするけど、とにかく、のん気な奴だと言われるだろうことを多くかかえているのが事実です。

ういうことはすでにつけたやつていることでしょうが、ふうさんのことだから……いろいろときよみあること、めてることをさがすこと、取り組んでみることも必要だと思います。

さくおくのおどろえなど、歳をとつたらだれでもあること、気にやまないことです。しんこくならないことです。気楽に考えるようにしようよ。

2019.5.22 —— 水田ふう宛

風さん。お便りどうもありがとう。五月二〇日(月)に受けとりました。すっかり確りした字が書かれていたので安心しました。間違いなく良い方向に向つていることは確かですね。

一人でみそ汁をつくってごはんもつくつて食べたそうで、すばらしいです。頑張ったんだね。とても嬉しかつたです。

でも焦つては駄目だからね。いつぶんに何でもかんでも、できる訳ではないからね。〔略〕

もう大丈夫、回復に向つているのですから、何も案ずることはないですね。あとは精神的なこと、気の持ちようでどんどん快方に向かうと思います。悲観したりくよくよしたり、アキラメたり、後向きになつてはおよそふうさんらしくないからね。

中島さん、先日は面会ありがとうございました。その後の私の方の経緯についてご報告いたします。ふうさんに読後伝えてやつてください。話は前後しますが、ご判読よろしくお願ひします。

近況(私の)は同封の中島さん宛のお便りに書きますので聞いて下さい。それではまた! 吕々もお大事に。私の元気さは変わりません。

2020.5.22 —— 中島雅一宛

それとご心配かけている眼鏡屋の件ですが、未だ進展なく状態は変つていません。当所に続けて来所していることは間違いないのですが……斯んなことまでイジメかよ? と思わせる有り様です。今月いつぱいは待つてみます。

松浦さんから差入れて頂いた三万円、面会日同日告知を受けております。どうもあ

りがとうございました。預かっていたお金から、その分返納していただけます。発信の都合で松浦さん岸田さんへのお礼の便りも遅れていますが、どうぞこの件につきましてもよろしくお伝えいただけましたら幸甚です。多忙を承知のお願い、申し訳ありません。ごめんなさい。

何時も明るく前向きで樂観的のもの」とを考えるようによります。私はこのことなど、気にしない気にしてしまいますよ。気分転換の散歩がひんぱんにできるようになるといいですね。それもじきに叶うでしょう。頑張ろうね!

獄窓から 2019.5.5-2020.3.4 —— 泉水博

そうして、後になりましたが、ふうさん  
の介護、手助け、毎日本当にご苦労さんで  
す。何一つお役にたてない身が本当に口惜  
しい限りです。おまかせするばかりです  
が、どうぞ呉々もよろしくお願ひします。

今回のお便りで良い方向へのきざしがう  
かがえ、とても嬉しく感じております。中  
島さんもきっと感じておられるでしょう。  
ご苦労の甲斐となられる様、一日も早い回  
復を唯々祈つておられる次第です。どうぞ今後  
ともよろしくお願ひ申し上げます。

5/17（金）当所の春の運動会（今年か  
ら変更となつた）が午前中（九時～一  
時）行われ、私はもつぱら応援組への参加  
でしたが、気分転換の一つとはなりま  
した。今年はその競技種目も到頭六種類位と  
またまた規模縮小となりました。

懲役にとつて良いことは何事か少なく  
なつて行く傾向にあることを、此処数年特  
に感じています。

社会の影響もあるのでしょうか、人の考  
え方、ものごとの見方、行動においての変  
化も多く感じ、私として一番に淋しく残念  
に思うことは、明らかに“人の情”が薄ら  
くお願いします。

この眼鏡については、仕方ないと思いつ  
つも、岸田さん同様松浦さんにも大変ご面  
倒をかけました。どうぞついでの折にもよ  
ろしくお伝えいただきたく存じます。どう  
もありがとうございました。どうぞよろし  
くお願ひします。

5/17（金）の春季運動会（これまで秋  
期だったものが今年から変つた）は、無事  
済みましたが、運動場への各工場からの  
(一四ツ工場) 入場行進から開閉のセレモ  
ニー、五種目の競技（四〇〇mリレー四  
人、玉運び三人、うさぎ飛び競争三人、大  
玉ころがし六人、玉入れ競技七人）そして  
○×クイズ全三問題三人）の計六種の各々  
チーム対抗試合で、正味一時間という処。  
終つて帰工場までの約二時間という幼稚園  
(保育園?) 並みの質素なものでした。年  
に一回のこの行事、昔は外での昼食をはさ  
んでの仮装大会も入つた、四～五時間の行  
事だったものでしたが、変われば変わるもので  
す。何事なのでしょうね。懲役の分際で運  
動会などと……という訳なのですかね。そ  
う云えば、此処三〇年間は外での食事など  
という楽しいことからは全く縁遠くなりま  
した。〔略〕

いでいる」とです。そして官僚的傾向が強  
くなつていつている状況にあります。全く  
温かみを感じることが少なくなつていて  
います。本当に残念です。

紙面尽きました。また書きます。大変で  
すが、どうぞよろしく。そして、呉々もお  
体大切に。梅雨に入ります。お元気で！

2019.6.2——岸田哲宛

岸田さん、先日はゞ多忙の中の面会、そ  
して今日のお便り、どうもありがとうございました。  
その後お変わりないですか？

この處、急激な気温の上昇で体調を崩す  
様なことはありませんでしたか。当岐阜で  
は三五度を超す状況となり、どうなつてい  
るのかと驚きを持つた程でした。最近は本  
当に天候の変動が激しく体調管理にも苦労  
させられますね。〔略〕

私はお陰さまで、その後も元気で過ぐさ  
せていただけます。懲罰取調べの件です  
が、5/21（火）に審査会を経て二二日に  
“戒告懲罰”が言い渡されました。仕事は  
これまで通り一五工場（洋裁工場、ミシン  
行つたが、他は順位も得点発表もなく終了  
となつた加減なもの。云つてみれば春  
季運動会を行つたという既成事実だけつく  
の順位が解つたからか。その発表、表彰式  
を行わない訳にはいかない（篤志面接要員  
など、五、六人出席）から、そこまでは  
何千と経験、教訓もありながら……個々に  
はそうした認識は何度も持たれて来たと思  
うのですが、何故、それが生かされなかつ  
た、生かされないのか？

運動会も得点集計も最後のリレー競技決  
勝が終つた段階で即中止。一位～三位まで  
の順位が解つたからか。その発表、表彰式  
を行わない訳にはいかない（篤志面接要員  
など、五、六人出席）から、そこまでは  
何千と経験、教訓もありながら……個々に  
はそうした認識は何度も持たれて来たと思  
うのですが、何故、それが生かされなかつ  
た、生かされないのか？

どうもこの話になると終るまでが長そ  
う、何事心が伝わらないか。これまで何百  
回もこの話になると終るまでが長そ  
うですね。というより尽きないですかね。そ  
れ自体が残念です。疾に解決している問題  
と思えるのですが、不思議な気がします。  
〔略〕

また書きます。といつても、余りにもせ  
まい世界からは毎度同じ様な話になつて恐  
縮ですが、その辺はご寛恕下さい。お元気  
で！ 亂筆乱文失礼します。よろしくご判  
讀を。

私達からの意見を集中しても、応対こそ  
すれ実質ほとんどが“又力に釘”。年々規  
則は（細かい）作り、規則は強めて押さえ  
つけても……表面、いわゆる外ヅラの良い  
ご無理ごもつとも人間を作つてゐる丈と  
判つていながら延々と繰り返す、全く進歩  
のない教育（矯正といつもの）。尤もそれ  
に関わつてゐる丈で、総じて大なり小なり  
生きることは安泰ではあるから、云つてみ  
ればそれもまたフリして生きる人達ではあ  
りますが。一体全体、心伝わらない（打た  
ない）教育を未来永劫続けるつもりなので  
すかね。頭のいい人が、いくらでもいなが  
くあります。

2019.6.25——水田ふう宛

ふうさん、その後体の調子はどうです  
か。お便りどうもありがとうございます。6/11  
(火) 夕方受取りました。介護認定された  
そうで良かったです。不自由だった点が少  
しでも解消されたことでしょう。中島さ  
ん、どうもご苦労様でした。

縫製作業) で就業しています。「作業安全  
衛生違反」だそうです。

結果、五月の生活評価点が減点されるこ  
とで、四月から九月までの優遇区分が第四  
類に降下となると思ひます。ガックリと  
いつたところですが、めげずに、また一か  
らのやり直しです。色々とご心配、お気遣  
いをかけ申し訳ありませんでした。頑張り  
ます。

結果、五月の生活評価点が減点されるこ  
とで、四月から九月までの優遇区分が第四  
類に降下となると思ひます。ガックリと  
いつたところですが、めげずに、また一か  
らのやり直しです。色々とご心配、お気遣  
いをかけ申し訳ありませんでした。頑張り  
ます。



## 面会記②

2019.11.19

12時半、岐阜刑務所に到着。門衛の顔なじみの女性からふうさんへの見舞いの言葉をもらいつつ、待合室へ。13時少し前に呼ばれて、3番の面会室に入りました。

泉水さんは緑色の作業服を重ね着して登場。顔色はよく、元気そうでした。

まずは水田ふうさんの病状について私が説明しました。泉水さんは、付き添いをしているこちらを慮る言葉を口にした以外は、ただじっと聞いていました。その後、泉水さんの方からの話をききました。

カイロはすでに使っている（一つ40円弱）、いくらでも使っていいが、ひと月に購入できるのは30個。結局、毎日使おうとすれば1日一つしか使えない。どうにかならないか、と再度掛け合っているそうです。現在重要な問題は、メガネと歯の2点。

まずはメガネの件。刑務所出入りのメガネ屋が持ち込んだ測定器で正式に視力を測り、5万円ほども出して新調したが、どうもレンズが合わない。よく見えない。調整してもらいたいが、刑務所は「業者と直でやつてくれ」という態度をとっていて、出入りのメガネ屋には要調整の旨伝えたけれど、ひと月待たされ通し坪が明かない。

次善の策として、昨年新調したJINSのメガネのレンズの方がまだ調子が良いから、合わないフレームだけ直して（フレームというか、両脇のつるのカーブする部分をもっと手前につらして）、入れ直して欲しい、とのこと。

歯について。グラグラしてきた歯が数本あり、差し歯なら4~5万、入れ歯だと12万だと出入りの歯科医は言う。泉水さんとしては入れ歯の方がいいと考えている様子。

領置金と報奨金をミックスして使うには、何か刑務所サイドの根拠がよくわからない内規がありむずかしいし、そもそも12万は高すぎる。しかし、ただでさえ噛める歯が少ないのでやむを得ない、差し歯にしようと思う、とのこと。

歯は健康上重要なので、入れ歯を希望ならば費用はなんとかする、と再検討を促しました。

別れ際、泉水さんはなかなか扉の向こうに去ろうとせず、帽子を手に持ったまま、ふうさんをくれぐれもよろしく、くれぐれも……と、何度も何度も頭を下げて、面会室に立ち尽くしていました。（N）▼35頁

変わりなくお過ごしのことと存じます。私は、お陰様で元気です。どうぞ心休め下さい。

お便りではふうさんの近況を知らせて頂き、どうも何時もながらのお気遣いいただきありがとうございます。検査、集中的治療のためにお隣りの小牧市民病院への入院の由。少し安堵しております。

そして先ずは一日も早い病状改善を祈っております。ふうさんには呉々もお大事にとお伝え下さい。

11/19、来週火曜日の面会予定のご連絡どうもとても楽しみにしております。松浦さんにもご無沙汰で失礼しております。どうぞ呉々もよろしくお伝え下さい。お願いします。

いま、松浦さんのご援助でやつとでき上がった眼鏡で目下、ちょっと下ラブつている状態で、再度レンズ交換をしないといけない結果となっております。

加えて歯科治療の件で当局と話し合いが必要な状況となつております。面会時にお話しします。

までは収容者もマスク支給がされました  
が、何故か昨年からは支給が止まりました。  
予算の関係ですかね？

ところで、面会時宅下げの眼鏡の修理の件ですが、決して急ぎませんので、どうぞ呉々もその点ご留意下さい様お願ひします。風さんのご容態が落ちつき、回復に向つて中島さんの手を煩わせることがなくなつてからで結構です。〔略〕

なんであしからずです。それではこの辺で失礼します。松浦さんによろしく。

2019.11.25 ————— 中島雅一宛

中島さん、一九日の面会どうもありがとうございました。風さんの介護で多忙の中

果が出るか？ その点についても詳細報告

できると存じます。結果はともかく……そ

して、歯痛の苦しみから抜けださないと。

がされ、その点についての当局と相談の要

がある状況となつて、果たしてどういう結

がで、残念な状況になると思います。そ

れもすでに織り込み済みのこと故、次の闘

いに向けての準備に入るとしている次第で

す。一応、安田・山下両先生との相談の上、具体的方針が出ると存じますので、そ

れからですね。〔略〕

今日は他の休日との関係で矯正指導日で作業は免除、半休日の状態で居室内で一日を過ごし、自己改善ワークブックに取り組んでいます。（毎月第二、四金曜日が定期日ですが）提出文も書き終つてこのお便りを書いている次第です。大分乱れた字となり申し訳ありません。心の乱れはありません。心の乱れはありません。

中島さん、ご自身の体調に変化はありますか。仲々そこまで気をつかうこともむづかしい状況にあるかと思いますが、どうぞ呉々もご自愛下さる様お願ひします。い

ま中島さんに変調があつては、それこそ大

変です。何一つお手伝いできぬ身を棚に上げて勝手なことを申し上げ恐縮です。ごめんなさい。正直な気持ちです。

風邪・インフルエンザも流行しましたとか。当所職員も今月から全員がマスク着用で勤務っています。此処では感染は職員を介してしかありませんからね。一年年

もあとうかと思つてます。〔略〕私としては来年の三、四月頃になるかと思つていたことがはるかに早い時期に治療に入れることがで、とても感激感謝している次第です。

それにも、この旨を風さんに現状報

告できぬことが残念です。よしたとえ少し遅くなつても、風さんに認識していただけ

る様になることを祈り続けたいと思いま

す。八月時の風さんのあの元気さを見てい

た丈に、今回の中島さんのご報告をうかがった時はそのギャップの大きさもあってガクッと来たのが正直なところです。それでも少しづつでもノドを通して食を摂れるまでになっているとの由。そして、体力をつけての再度の手術が行われる予定をうかがい、気持ちを立て直すことができています。いまはその手術の成功と、その先の光明を希みに、共に頑張つてまいりましょう。〔略〕

## 2020.2.9 —— 舟橋寛延宛

寛延さん、その後もお変わりなく、ご健勝でお仕事に励まれておられるごとに存じます。ご家族の皆様にもお変わりございませんか。先日の面会どうもありがとうございました。何時もの様にとても楽しいひと時をすごさせていただきました。

暖冬もこの処に来て、気温が下がり平年並みのこと。ですが、当所に来て二五年目になりますが、この時期になつても初雪を見ない冬に驚いています。気象庁の記録更新とか。私達懲役にとつては誠にありがたく大変助かっておりますが、これ程まで同じなのです。無事故獲得がなければ。元の一五工場への出役はすぐにも可能となるでしょう。

二月三日当日の経緯です。「以後、二行強判読不能。スミ塗り。」私の部屋は北側でした。朝食を終え七時四〇分頃出役となり、扉の開錠閉錠となり、私はその日の洗濯物（下着）を数枚と廃棄（別場所）する使用済みのカイロ五、六個位（連休明けで）を手に、先ず出口外付近に出し、サンダルを出口に置いたその時、廊下左方から、向いの両側居室に向つて走る足音と影を見、同時に人が身体をぶつけた時発する音を聞き、「喧嘩だ」と思い顔を上げ廻りを見ると向い側の部屋から廊下に出かけた者、出たそうに立つ者、左右、五、六人を見たが、職員の姿は見えず。咄嗟にまずいと思つたときには、身体は向側にとび出していたのです。勿論サンダルもはかず靴下の

になると、農家を始め、職業、商売の上で困ることも少なくない人達もおられると思うと、喜んでばかりもいられませんね。〔略〕

ところで、甚だ恐縮で申し訳ない報告となります。どうぞご勘弁下さい。

実は、現在、二月三日（月）早朝から「喧嘩の容疑」で取調べ処遇となつて「以後、一行弱判読不能。黒いボールペンで幾重にも螺旋状に上書きされている」室内作業に就いております。

あくまで、私は喧嘩の当事者（二人）ではありません。争いの留めに入つた丈ではあります。当事者にも怪我はなく、大事に至つてしまふ。寛延さんを始め、多くのご支援者の皆様のご期待をうらぎる結果となり、誠に申し訳なく、唯々お詫び申し上げるのみで、いまは、何の言葉もありません。

当所では、以前から、処遇部長の訓令通達で、私達懲役が喧嘩の場に遭遇しても、避け、一切関わらずに、その場に黙つて職員の指示を待ち、その指示に従つて行動することが定められております。従つて、私は晴れたと思います。実際の当事者一人からの供述でもまた、一〇人を越すであろう現場での目撃者の声でも明らかになつてしまふ。従つて、その点についての何の心配はないのですが、問題は、懲罰（閉居罰）とはならないですが、若し訓戒処分となつた場合は事故扱いですから、この間念

まま手にしていた荷物を放り出しながら、真向い二室に向けて、その前に私に背を向け腰を落とした格好でいる者の後から組みついていきました。

瞬間に自分の右手は相手の右肩ごしに入れて相手の脇の下にとどき、右腕をまわしつかみ、左手は相手左脇の下から入れて左腕ヒジ当りの衣類をまわしつかんでいました。相手の後への頭突きを避けるために身體全体を相手右肩当りに寄せ、両手の力を引張り、しかも低い姿勢で背中にぶらさがる格好で相手の動きを止める形となつて襟元に駆けつけた職員（二人）に左右から手をかけられたことで私達は後に倒れ込み、私は右腕を下に横になり相手をかかえたままであつた。そして職員の相手を押さえているのを見て、私はつかんでいた手を離し、抜いて立ち上がり離れたのです。

その後、散らかっていたカイロ等を拾い集め、自分の部屋の前に戻つた。その間終始、私は声を一切発していません。

相手は私から職員によつて引き離され三七室前当りから、「泉水！ お前は何の関係もないのになんだ！ なぜ止めた！」

の行動は違反行為となり、容疑・嫌疑がかけられても仕方のないものです。その違反であることを知つてはいて、今回はその状況的にも、先ず、咄嗟に身体が動いてしまつたというのが事実です。傍観していることが無いことはこれまでの私の生き方の中での理性で得てきた判断・行動でした。たとえ容疑がかけられても仕方のないことだと思います。傍観していた方が悔を残すことになつたと考えています。その事実経緯については後に記します。

すでに、五日（水）の午前中に取調べが行われ、調書も作成済みです。今週中に審査会が開かれると思います。

私は今回の喧嘩の当事者の一人と誤認しました。当事者にも怪我はなく、大事に至つてしまふ。対しての職員からの報告書が提出されていることも承知しています。

しかし、取調べが終つた現在、その疑いは晴れたと思います。実際の当事者一人からの供述でもまた、一〇人を越すであろう現場での目撃者の声でも明らかになつてしまふ。従つて、その点についての何の心配はないのですが、問題は、懲罰（閉居罰）とはならないですが、若し訓戒処分となつた場合は事故扱いですから、この間念

……と興奮状態で大声で怒なつていました。三回位繰返していたので、余りしつこいので、「うるせえ！ 何の関係もねえから留めたんだ！」と一度応え返しましたが、「全員、部屋へ入れ！」の職員の声に、自分の部屋に戻り入りました。その後すぐに部屋から再び呼び出され、別の職員二人に連行されて処遇部の取調べ室に行きました。そこで、喧嘩の容疑で取り調べると言はされました。喧嘩の容疑で取り調べると言ははいましたが、取調べ時に私は声をかけてきた相手の声を聞いて始めてその喧嘩の当事者の一人が五〇代の同僚Nだと分つた次第で、今一人であろう者が誰かは、私の部屋の向いの部屋にいた二部屋にいた二人のうちのどちらか？ 六〇代の同僚Oか七

二歳の同僚Sのどちらかだろうと思つてはいましたが、取調べ時になつて始めてSだということを知つた次第です。従つて、当然、原因が何かを始め、一切何も知らない、分からぬのが本当です。

今回の一件で私は一番驚いていること

は、日頃、喧嘩に遭遇の際の対処対応について斯うあるべきと認識していても、その状況等で変化して当然で、今回の様に自然に身体が動いてしまうもの。それが実

## 面会記 ③

2020.2.18

報告が遅くなりすみません。18日、ふうさんの友人葬の翌日、岸田哲、中島雅一、松浦武夫の3名で泉水さんと面会してきました。泉水さんは入ってくるなり、私の顔を見て何かあったなという顔をしました。

この日はまず、私がふうさんが亡くなつたという報告をしました。

緩和ケア病棟という環境を得て、たくさんの友人たちに看取られたこと、苦しまなかつたことを伝えました。ふうさんの病気について報告するとき、いつもそうでしたが、泉水さんはあまり表情をみせず、黙つて私の報告に聞き入っていました。

面会後半は、やはり、喧嘩の仲裁に入つてしまつたことをめぐつてのものもろの煩悶が主な話題となりました。今度は一方的にかなり長い間泉水さんの話を聞く番でした。

自分が喧嘩の原因ではないこと、刑務官がそこにいなかったから起きた問題であることなど、以前の同房懲役同士の軋轢などとはちがい、当事者として苛まれているような感じはせず。しかし、処分が軽く済むか、喧嘩両成敗、連帶責任で重い処分になるか、気をもんでいる様子でした。

その後の経過が知りたいところです。ふうさんのことでも、仲裁の件でも、気を落としていないといいのですが。面会の後に手紙を出しましたが、返信はありません。(N)

2020.3.16

泉水さんの面会に行ってきました。午後1時半受付、受付番号は3。この日は受付の前にまず体温を測られました。37.5°C以上だと面会自粛を要請されます。受付から10分ほどすぐ呼ばれ、第2面会室へ。(岐阜刑の面会室は全部で三つあります。)

泉水さんは元気そうな足取りで入ってきました。冒頭からほとんどの時間、泉水さんが今回の懲罰に関する話を展開。以下、要点を。

①喧嘩仲裁は「訓告」ぐらいで済むと思っていたのに、10日間の閉居を食らったのは心外。どうしても腹に収まらない。

②囚人同士の喧嘩に関わってはいけないという指導・規則については理解しているが、「現に喧嘩が

がつての、「泉水、君の善意は十分わかっているのだから……」と、それ以上は何も云うな!といった状況・雰囲気を見せ、なおも……私が言おうとすると、立ち合いの警備職員による、「気をつけ! 話は聞けた」といった号令でおい出される感で、その場にとどまることがなわない状態をつくられ、止むなく帰室となる。その場で逆らえば別の違反名をつけて、また更に懲罰対象となること必至なので……

以上、書きなぐりで「判読に苦労かけます」が、ご容赦ください。またまたご心配をかける結果となり、本当に申し訳ありません。「めんなさい。私は元気です。肉体的にも精神的にも問題はありません。動搖もないといいたい処ですが、今回此処第四棟に来て発信日を取り違えてこの様に遅れたほども度しがたいことの様です。一週間か一〇日位で結果は出ると思います。皆さんに興々もよろしくお伝え下さい。

風さんも今月誕生日なんですね。お便りできればいいのですが……彼女、一定落ちついたのではと思っているのですが、その後の容態はどうなのでしょうね。

どうぞよろしく。また書きます。頑張ります。お元気で。取り急ぎ不十分ですが報告します。

## 2020.3.4——舟橋寛延宛

風さんも今月誕生日なんですね。お便りできればいいのですが……彼女、一定落ちついたのではと思っているのですが、その後の容態はどうなのでしょうね。

どうぞよろしく。また書きます。頑張ります。お元気で。取り急ぎ不十分ですが報告します。

以上、書きなぐりで「判読に苦労かけます」が、ご容赦ください。またまたご心配をかける結果となり、本当に申し訳ありません。「めんなさい。私は元気です。肉体的にも精神的にも問題はありません。動搖もないといいたい処ですが、今回此処第四棟に来て発信日を取り違えてこの様に遅れたほども度しがたいことの様です。一週間か一〇日位で結果は出ると思います。皆さんに興々もよろしくお伝え下さい。

態だということです。

会どうもありがとうございました。翌日の中島さん達の面会で詳しくお話しいうかがいました。ふうさん残念でしたが、皆さんと一緒に別れも一応果たせた様で、また、犬山へもお帰りになつたそうですね。中島さんもご苦労かけられた様で、本当にご苦労様だと思いました。本当に残念です。

会どうもありがとうございました。翌日の中島さん達の面会で詳しくお話しいうかがいました。ふうさん残念でしたが、皆さんと一緒に別れも一応果たせた様で、また、犬山へもお帰りになつたそうですね。中島さんもご苦労かけられた様で、本当にご苦労様だと思いました。本当に残念です。

(三) 四年前の処遇部長訓令で喧嘩等に介入の禁止が出され、それ)に当たるからという訳で、要是當局の思惑として、あくまで懲罰有り氣で、当然と云えは当然なので、それを読まなかつた自分のドジが災いしました。

とひろで、今日は取り急ぎ筆をとつていります。実は三月一日(日)、私は閉居懲罰の一〇日間が終わり、その日に出役になつたのですが、違う工場で、これまで一四工場だつた工場が旧三工場へ移つて、今度工場名が三工となつた工場出役です。

実は、先日の面会時、元(一五工場)すぐにも帰れると云いましたが、私のとんだドジで、またまた失敗してしまいました。先に、喧嘩騒ぎを止め、誰も怪我も出づに止めることができ、私には全く問題ナシと話しました。その2/5(水)の喧嘩の容疑での取り調べは容易に晴れたので追々帰工できるとしました。

ところが、二月九日(金)になって、別

の職員による、いきなりの取調名を指導違反と変更することことで、手続きが取ら

しかし、問題は、今回の場合あくまで立ち合い(騒ぎ現場に)職員が騒ぎがおさまつた、言ってみれば私が止めた後になつて駆けつけ、その不在でそもそも私が止めなければならぬ状況におかれた訳で、その状況を好む好まない、またその意志の有無に限らず、その状況をつくったことは違いない訳で、その主張は通さなければ、としていたのですが、その指導違反についての一切の取り調べがないままに、2/20(木)に懲罰審査会が行われ、そこに於いて、今度は私の弁明の機会は与えるかの姿勢を見せながら、いざ私がしゃべりだしたら二言三言で、「反省していたら次からやらなきやいいから」といつた、それ以上は私からの弁明は聞く耳持たずの態度と霧囲気の会場となり、更に一委員が立ち上

そして翌日、決定云い渡しとなり、閉居21(金)から受罰、3/1(日)に解罰となつた次第。一応工場出役は、その翌3/2(月)に第三工場、私の職場はいわゆるもた工、子供のハンカチ作りの仕事をやっています。(内職仕事)

○分まで可なので)提出はしましたが……

ということで、これ以上は、書けば先のお金便り同様の墨入りなどになりかねないので止めます。ちょっと度が過ぎる状態。その結果に關係なく、先生達のご意見を伺いたく思っていますので、是非、お時間が取れたら、一度来所いただけないでしょうか。時間(面会時間内に限られます)は、ご都合の時間帯で結構です。

唯、ご多忙は重々承知していますから、

つくつて(懲罰中、夕食後から就寝八時五

決して無理はしないで欲しいです。管区長への審査申請も正直どうなるか、ま、先ず八割方だめでしょう（却下）。

ずみな驚いています。喧嘩でなく、指導違反、それも明らかな職務違反、怠慢中に起きたこと……

その後は、大臣の再審査申請も残されているものの、かなりハードルが高い状況であることは間違いない現状なので……。これでいずれにしても取り消しとならない限りは待望の無事故はダメだし、何より余りにも今回はひどいです。廻りは懲罰に限ら

に、またなかなか連絡もむつかしいでしょ  
うが是非、お伝えしておくことは済まして  
おく必要があると思つて……どうぞよろしく  
お願いします。この先、拘禁があり得ますので、そ  
うなるとまた問題ですしね。  
うぞ異々もご無理をしない範囲でご一考下

「Eさんからの葉書に、ヒロシによろしくつて書いてあるけど、だれのことやろ？」  
「そりやあ、岐阜刑のヒロシに決まってるよ」  
「あつ、そつか」

といつて、ふうさんとふたりで笑つた。

岐阜刑のヒロシは、明るくてあけっぴろげ。話し好きでよく笑う。言葉はよそいきの「寧語」。年長者であつても、どこでもかさばらない術の持ち主のように思えた。面会者皆に会話がおよぶように、なにげなく配慮して、いま苦境にある者へは、飾らないやさしい言葉を向ける。気づかいと思いやりの人。だから、面会に行くとき、気が重くなつたことなど一度もない。

そんな泉水さんでも、獄中で平常心を保つのは大変だつただろう。同じ房や工場で人間関係がもつれたり（たいがい一方的に泉水さんがしがけられた）、積上げた「無事故」が剝奪されたときなどはとくに。晩年、泉水さんは懲罰を受けることが増えた。懲罰を受けるということは、それまでの努力の結晶——「無事故」がフイになつてしまふということだ。

スミマセン、また一から出直しです。頑張ります、と恐縮する泉水さんへの返答にはいつも困つた。血のにじむような思いの「無事故」をとりあげられて、いちばん悔しい本人をして何を言えるだろう。

発生した場に、職員がいなかつたのだから」（=自分の行動はある程度、容認される）。この表現は複数回、口にされました。

③最初は止めに入った泉水さんと、止められた（蹴りを入れようとしていた）懲役が喧嘩していた、と誤解された。その誤解はすぐ解けたものの、数日してから「指導違反」という名目で取り調べられ、その場での弁明に対しても聞く耳を持たなかった。

④名古屋管区に不服申請をするが、多分ダメだろう。弁護士さんのアドバイスが欲しい。

⑤このところ血圧がひどく上がってしまい、めまいがして、2回ほど医務室に行った。（弁護士さんへ）手紙を書いたりしたいが、ふわふわして調子が悪い。現にいま面会している最中も回っている。

——大よそ、こういった内容で、話が前後したり繰り返しがあつたりで、泉水さんの感情が高ぶっていることがみてとれました。舟橋からも用件があつたのですが強引に遮らないと、口をはさめない状態。

いつも面会時間30分を告げるタイマーが鳴った後、たいてい話題・伝言が残っているので、泉水さんは係官に「ちょっと（延長・黙認）すいません」と断つて、口早に伝言などを話すのですが、この日は係官に対してそういった姿勢は見られませんでした。

最後になって、「（刑務官がいないタイミングで、泉水さんの目の前で喧嘩が起き、止めに入るというの）すごく泉水さんらしい、と思いました」と私が話したところで、ようやく双方苦笑する場面があり、ホッとしました。

刑務所のルールはルールだとしても（それは泉水さんも一定認めている）、その場に誰もいないのにはつておく訳にいかない。それを止めた自分が、訓告程度なら容認できるが、10日間もくらって、別の工場に移らなければいけないのは、腹に取まらない。

この点をめぐって、怒りがわき出ていると思います。長い泉水さんとの付き合い、その心境はよく理解できますが、当局とは平行線になるだろうな、とも感じています。

また、めまいで医務室を行ったという部分では、本人は「倒れた」という表現をしていました。具体的に意識消失があったほどではないようですが、詳しい状況を尋ねても、話題は懲罰に戻ってしまい要領を得ませんでした。今の泉水さんの心境、健康状態を考えると心配なので、今月もう1回、面会に行こうかと思案中です。（F）

## 岐阜刑のヒロシ

### 富田琴太郎

そして泉水さんはいつも、昔の刑務所はちがつた、昔の刑務官にはもつと人間味があつた、といった言葉をもらすのだった。

裁判の後の報告会で、安田好弘弁護士が、この傾向はよくないと苦言を呈したことがある。泉水さんも対応を変えるべき時じゃないか。「昔は（）」といふ発想のままでは、仮釈放審理が遠のくばかりだ。

では、泉水さんにどう伝えればいいのか。泉水さんのこれまでの生き方を否定することにならないだろうか？ けつぎよく手紙でも面会でも、この件に触れることができなかつた。触れる相手として、明らかに自分は泉水さんにつり合わない。でも泉水さんにはもう時間がなない。そんなひそかな葛藤が未だに生々しい。

この世には、目前の喧嘩を見過ごせず、仲裁に入つたことで自分が懲罰対象となるお人好しもいれば、懲罰を受ける「悪質」な囚人に、仮釈放審理の機会を与えないことは、「法の予定するところ」なのだと書きつけるような感覚の持ち主もいる。

私にわかっているのは、四七年三ヶ月以上獄にあって、泉水さんは泉水さんのまま、泉水さんらしく生きたということだけだ。失敗を含めて、泉水さんは自分の生き方に誇りを持っていた。その自負を、目に見えない刀としてかまえたまま、泉水さんはこの世を去つた。

# 最後の面会まで

ふうさんたさそわれて

泉水さんとの出会いのきっかけは、数年前に受けた水田ふうさんからの突然の電話だった。当時、岐阜刑務所において無期懲役により服役中だった泉水さんの身柄引受人の候補になつてくれないか、という内容だった。ふうさんは前後の事情を簡単に説明したあと、なにかの集会にでもさそぐような落ち着いた調子でそのことを頼んできた。

りていう、逃亡には非ず』をじっくり読み直してみて、泉水さん的人柄に魅かれるものを感じて、「ぜひ会って話してみたい」と思うようになった。

ただ、自分の年齢（当時七〇代半ば）を考慮すると、一人で長期間にわたってその支援をするのは不安だつたので、以前に社会福祉の現場で一緒に働いていた、自分より大分若い松浦武夫さんに声をかけたら、「わかつた。一緒に行く」と即答してくれたのが心強かつた。

泉さんとの面会の始まり

分ではない」などのよくわからない説明で断られたので、当分はこの調子でねばつていこうと思っていた。

断られたので、当分はこの調子でねばつていこうと思っていた。

役により服役中だつた泉水さんの身柄引受けの候補になつてくれないか、という内容だった。ふうさんは前後の事情を簡単に説明したあと、なにかの集会にでもさそぐような落ち着いた調子でそのことを頼んできた。

たた　自分の年齢（当時七〇代半ば）を考慮すると、一人で長期間にわたってその支援をするのは不安だつたので、以前に社会福祉の現場で一緒に働いていた、自分より大分若い松浦武夫さんに声をかけたら、「わかった。一緒に行く」と即答してくれたのが心強かつた。

泉さんとの面会の始まり  
ところが、この年の一〇月五日の名古屋高裁の泉さんとの交通権共同訴訟の判決と、それに続く国側の上告断念という画期的な出来事があり、一月二八日に半信半疑で面会を申請したら、何と、今まで通れなかつたゲートが開かれたのだ。ふうさんはこれまでも裁判の原告として面会が可能だつたのだが、こうして三人揃つて面会するは初めてで、さうして喜んで

まず驚いた。ふうさんを真ん中にいて松浦さんとぼくが座つたのだが、泉水さんは一人ひとりの顔をガラス越しに交互にしつかり見つめながら熱心に語つてくれた。

三〇分の面会時間はあつという間に過ぎた。折り目正しく気遣いができる人であるという印象で、その人柄にいつそう魅きつけられた。

その後、三、四ヶ月に一度のペースで、同じ顔ぶれによる刑務所通いは続いた。（ふうさんは毎月、中島雅一さんと共に、面会を続けていたが。）面会室には三人しか入れないという制限があったので、犬山からいつもふうさんに付き添っていた中島さんは待合室で待機してもらうことになつた。少し忘れっぽくなりはじめていたふうさんのために、面会後に中島さんはその内容を聞いて丹念にメモをとつていた。

果しながら、苦しさの中にも生きることの楽しきがあることを感じ持てる様生き抜くこと。それを喜びとすることを希つています」と記している。これまでに味わった逆境と辛苦の連続の人生を思うと、泉水さんが感じている心境の深さに言葉を失う。

が胆のうの摘出手術を受けて体力が落ちて  
いることを一寸だけ伝えていたのだが、泉  
水さんは「その後の回復状態を案じ」と心  
配してくれて、どこから知ったのか、「お  
誕生日おめでとうございまーす。……興々も  
ご無理のない日々をお過ごしになられます  
様にお願い申し上げます。興々もご自愛  
を！ 共々に頑張りましょー」と肩をたた  
いてくれたので、当時やや元気をなくして  
いたぼくは背筋が伸びるような思いをした  
ことを思い出す。泉水さんはあの境遇にあ  
りながらも思いやりを忘れない人だつた。

三人で、ふうさんの葬式の翌日に行つた時のことだつた。中島さんがふうさんの病状と死のいきさつをくわしく語るのを泉水さんは黙つて聞いていて、その説明に対してもふれることなく話題を変えた。泉水さんの表情はほとんど変わることがなかつたが、そのまゝとでかえつて落胆の大きさと悲しみの深さがぼくらの胸につき刺さつた。

最後の面会室まで——岸田哲

泉水さんはあるときの手紙で、「年々歳とともに色々な病いとの闘いを余儀なくされます。ままならぬことも多くなりますが、それでも人生、身はいざここにあつても無理

最後の面会での様子

スチナやフイリピンなどの地に、あるいは  
ふうがんの近くとかに散骨させてもらつた  
らしいような気分なのだが、それも夢のま  
た夢である。

# 風の噂ふうに

中島雅一

自分の死は、風の噂で——とい

うのがふうさんの理想だった。でも、ふうさんを介して泉水国賠に力を添えてくれた方は多く、ふうさんなしに泉水国賠は成り立たなかつた。だから、そのことについて誌面でふれないのでないかな。あらためてここに、ふうさんが亡くなつたことを報告します。

水田ふうさんが亡くなつたのは、二〇一〇年二月一六日。八〇年代末に胃がん。二〇一〇年に乳がん。サバイバーになつて、ふうさんはがんをぶりきつたと、私はすつかり安心していた。でも、いま考へると、何かの予兆だつたのもしれない。一八年夏、台風で庭の大きなクスノキの

幹が折れた。その前後、ふうさんは、腰、背中の痛みを訴え、原因不明のままひと月寝込んだ。しばらくして痛みはおさまつたが、審判決全面敗訴を伝える「つうしん」16号の編集後記でふうさんは次のように書いている。

「ちよつとしたこと」というのが始まつてゐたいや。その自覚の始まりは、二年前になるかな。裁判所に行くのに、名古屋駅の銀時計で待ち合わせしていって、近づいてきた中島くんに「わたし、なんで、ここに立つてるんや?」と尋ねたらしい。「略」

●実は、わたし、どうやら認知症が始まつてゐたいや。その自覚の始まりは、二年前になるかな。裁判所に行くのに、名古屋駅の銀時計で待ち合わせしていって、近づいてきた中島くんに「わたし、なんで、ここに立つてるんや?」と尋ねたらしい。「略」

41

●きのうのひるも、またたいへんやつた。「略」ひるねから目覚めたらとつぜん不安に襲われて、「おいちやんがいないんや。どこにもいらないんや」と中島くんに泣きながら電話した。中島くんは「向井さんはもう一五年もまことに亡くなつたんだよ」つて。

●去年の一月、総合病院の脳神経外科で診てもらつたら、「あなた後のことは、なかなか書くのがむずかしい。」

●「つうしん」はこれまで、口頭画像がモニターにうつった瞬間に、脳神経外科の医師の顔色がスッと変わつた。海馬のあたりに腫瘍がある。悪性であれば、手術をしても、脳の別の場所で再発するでしょう——医師は神妙な態度で、確信をもつて予言した。

40

これが、ふうさんが公にした最後の文章になつた。それから、一年もたたないうちに、ふうさんは旅立つてしまつたのだ。

ふうさんは泉水さんが、岐阜刑務所の外の土を踏む日の来ることを待ち望んでいた。先行きの予感は、暗かつた。仮釈放への絶望的な狭い門。泉水さんにして同じだつたと思う。それを無言のうちに了解しながら、ふたりの面会は成り立つていた。

でも、面会室でふたりはよく笑つていた。時々、刑務官もつられて笑つた。底通する明るさが、呼び合つてゐるよう見えた。

泉水さんの声が聞こえにくくなるとふうさんがにぎやかに注意する。「泉水さん、マイク、マイク」。泉水さんが何かのトラブルをかかえていなければ、話題は何でも、義の人——などといふ人とは話すのが好きだつた。

41

岐阜刑には月一度、ふうさんと通つた。いろいろな場面に遭遇したが、いちばん忘れられない風景は——

二〇一三年一月のこと。泉水さんは舟木友比古弁護士の支援を受けつつ、共同訴訟とは別に、無事故剥奪と順変がなされないことを本人訴訟で争つていた。

42

一審、門前払い。それが、意外なことに、二審では裁判官が被告人・國に証拠提出を何度も迫つた。気を持たされたが、けつきようは敗訴。裁判の翌日、ふうさんとその結果を伝えに行つた。

ふうさんは泉水さんを励ますつもりで面会室に入つていつた。泉水さんにとって、順変こそ悲願なのだ。でも、裁判の様子を説明しているうちに、ふうさん自身が悲しくなつて、大声で泣きだしてしまつた。岐阜刑の敷地を、泣きながら歩いてもどつて来るふうさん。の姿が、待合室の窓から見えた。

43

出会いはとびきりの偶然だつた。獄のなかでも押しつぶされない、でも、いまとなつては、必然だつたように思える。

ふうさんが面会に通いつづけ、裁判への協力を呼びかけつけたのはなぜだろう。

44

東京時代に山谷で出会つた鈴木国男さんの大阪拘置所での虐殺をきつかけにした、拘禁、隔離された人に向けられた思い。それはもう。そんな泉水さんへの資質的な親しみがふうさんにはあつた。

ふうさんは泉水さんを励ますことは、一生、その人が死ぬまで、面会に通うということ。こつちはやめられても、無期囚はやめられることの大きさではないか。

45

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

46

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

47

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

48

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

49

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

50

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

51

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

52

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

53

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

54

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

55

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

56

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

57

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

58

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

59

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

60

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

61

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

62

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

63

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

64

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

65

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

66

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

67

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

68

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

69

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

70

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

71

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

72

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

73

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

74

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

75

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

76

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

77

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

78

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

79

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

80

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

81

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

82

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

83

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

84

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

85

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

86

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

87

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

88

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

89

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

90

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

91

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

92

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

93

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

94

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

95

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。

96

ふうさんは泉水さんへはめられることの大きさではないか。</

は、控訴人の規律違反行為の存在のみを理由として、東京高検検事長が本件順序変更をしないことに裁量権の範囲の逸脱又は濫用がないと判断したものでもないから、控訴人の非難は当たらない。

第4 結論

よって、原判決は相当であり、本件控訴は理由がないからこれを棄却することとして、主文のとおり判決する。

名古屋高等裁判所民事第2部  
裁判長裁判官 松並重雄  
裁判官 飯野里朗  
裁判官 須持亮

令和元年12月11日  
名古屋高等裁判所民事第2部  
裁判所書記官 皆戸貴光

最高裁判所第一小法廷  
2020.7.16

最高裁判所第一小法廷

裁判長裁判官 池上政幸  
裁判官 小池 裕  
裁判官 木澤克之  
裁判官 山口 厚  
裁判官 深山卓也

当事者等

上告人兼申立人	泉水 博
同訴訟代理人弁護士	安田好弘ほか
被上告人兼相手方	国
同代表者法務大臣	三好雅子
同指定代理人	佐藤拓夢

裁判官全員一致の意見で、別紙のとおり決定。

別紙)

第1 主文

- 1 本件上告を棄却する。
  - 2 本件を上告審として受理しない。
  - 3 上告費用及び申立費用は上告人兼申立人の  
負担とする。

第2 理由

## 1 上告について

民事事件について最高裁判所に上告をすることとが許されるのは民訴法312条1項又は2項所定の場合に限られるところ、本件上告の理由は、違憲をいうが、その実質は事実誤認又は単なる法令違反を主張するものであって、明らかに上記各項に規定する事由に該当しない。

## 2 上告受理申立てについて

本件申立ての理由によれば、本件は、民訴法318条1項により受理すべきものとは認められない。

令和2年7月16日  
最高裁判所第一小法廷  
裁判所書記官 小林西久

- 泉水さんとの国賠や順々裁判の関りの中では、色々と考えさせられることが多い。その中で最も気になっていたことは、日本赤軍が彼を奪還対象者としたことの是非はどうなのだろうかということだつた。
- このことを強く意識したのは、裁判の中で明らかになつてき公安事犯と刑事事犯との司法・刑務当局の対応の違いを知ることになつたからだ。泉水さんに対する検察・刑務当局のいじめともいえるような扱いには、いま思い返しても憤りを禁じ得ない。
- また順々裁判の判決を書いた判事たちのあまりの狭量さには啞然とするばかりだつた。
- 泉水さんと同じくダッカで超法規措置で出獄した人は何人かいる。その中で日本へ送還された人たちで、日本赤軍との関係云々として判決で断罪された人はいない。ひとり泉水博士さんのみである。

- 国賠裁判をやろうとの言い出しつれば、ふうさんだつた。そのふうさんが亡くなり、続けて泉水さんが亡くなつてしまつた。年に数回、傍聴や会議のため岐阜や名古屋に行くことがあつたが、それも無くなつてしまつた。渡辺亜人
- 泉水さんの面会に毎月通い、やがて裁判まで進んだ日々が終わつて、もう一年が経ちます。いまこうして振り返つてみると、泉水さんとの面会での他愛のない会話が心に浮かんできます。
- 泉水さんは子どもが好きでした。私の子どもたちの写真を見て、「お兄ちゃんは腕白な顔つきをしてるね。弟くんはお母さん似でやさしい性格でしょう」と、楽しもうでした。あたかも親戚のおじぎんのようだ。
- 私の泉水さんとの関係は、支撑する・されるに留まらない、家族付き合いに近いものだつたようと思われます。八〇歳をこえて元気な泉水さんと接しているうちに、そんな日々がずっと続くような錯

● 覚をしていたのかもしません。  
● 面会に通い始めた頃はまだ小さかつた子どもたちですが、長男は間もなく中学三年生で、思春期まつただなかです。もし泉水さんが出所して近所にいたら、時にはそんな子どもの心をほぐしてくれたことでしょう。

● 舟橋寛延

● 感染症禍がおさまるのはしばらくのこと。終刊号の刊行は、自水さんの追悼会と国賠の総括会議をもつた後——のつもりでしたが、このままだといつになるかわからない。いまが泉水さんの死を伝える最後のタイミングだと考えて、「つうしん」を作りました。

● 刑務所が、自ら変るだろうか？ 獄内から裁判を起こせば、なんとかの不利を、狭い世界の中で日當的に背負わされる。でもこれは自分がだけの問題ではない——というのが泉水さんの立場だった。その意味では、交通権回復のための共同訴訟の意義は、あらためて強調しておきたかった。監獄の問題を取り組んでいる仲間と共にすること

のとして。また、眼鏡や入歯など、生活必需品を購入するさい、獄中者に嵌められている足枷についても。「つうしん」の積み残しです。

●もし、急に亡くなるようなことになつたら? 血縁ではない年長者とつきあう時の実務的な配慮として、泉水さんにいちど尋ねるべきだった。これは積み残しではなく、世間値の低さの自覚として。

●岐阜B.T脇の店で、甘いパンと稻荷寿司を買い、車中で昼ごはんを食べる。犬山から岐阜刑まで片道約二時間。面会窓口でふうさんはいつも、「私、誰だつけ?」と本気半分で尋ね、馴染みの門衛さんを笑わせた。岐阜刑の風景には、たくさん記憶が埋め込まれている。もちろん、泉水さんはにかみ。お辞儀の角度。意外とラフな刑務官へのしゃべりも。それにしても、泉水さんはいま、どこだ?

●これが「鵜飼町666」から届く、最後の印刷物です。泉水国賠への「支援、ありがとうございました。

28」を加える。

(5) 原判決25頁11行目の「甲13」の後に「14, 15, 26」を加える。

(6) 原判決28頁13行目の「(なお)から同頁26行目の「なる。)」までを削る。

## 2 控訴人の当審における補充主張に対する判断

### (1) 本件義務付けの訴えの適法性について

ア 控訴人は、本件で問題としているのは、平成27年3月10日以降に、岐阜刑務所長からの申請がない状態において、東京高検検事長が本件順序変更をするという判断をしない「不作為」であり、このような意味での「不作為」は、刑訴法502条の「検察官のした処分」に含まれないと主張する。

しかしながら、上記(引用した原判決「事実及び理由」欄第3の1(2)のとおり、刑訴法にいう「処分」は、一般に、事実行為及び不作為を含む広い概念であると解され、裁判の執行に關し検察官のした処分について、刑訴法が特別の不服申立手続を設けたことに鑑みれば、検察官の刑の執行に関する処分といえるものは、不作為も含めて広くその対象に含まれると解するのが合理的であり、刑の執行順序の変更をすべきであるのにこれをしないという不作為も刑訴法502条の「処分」に含まれると解するのが相当である。そして、刑の執行順序の変更をしないという不作為が刑訴法502条の「検察官のした処分」に含まれると解する以上、刑事施設の長からの申請を前提とするか否かによって、その結論を左右しないというべきである。控訴人の主張は採用することができない。

イ 控訴人は、原判決が例示する刑訴法309条2項の「処分」の主体は裁判長であり、主体が異なるから、刑訴法502条の「処分」に不作為を含むと解することはできないと主張するが、同一の法律内で使用される用語は、合理的理由のない限り、統一的に解釈されるべきであるところ、控訴人の主張によても、主体が異なることによって「処分」の意味内容を別異に解す

べき理由は明らかでない。刑訴法309条2項の「処分」に不作為(例えば、適切な法廷監察権を行使しない不作為)が含まれると解されていてることに照らしても、刑訴法502条の「処分」に不作為が含まれると解するのが相当である。

ウ 控訴人は、行訴法37条の2第1項が定める補充性の要件は、重大な損害を生ずるおそれに関する要件と相まって判断されるべきものであり、他に救済を求める方法があり得るとしても、権利救済の実効的救済の観点から、その方法が義務付けの訴えとの対比において適切な方法であるか否かといった判断をすべきであるところ、本件では、不作為による「検察官のした処分」が刑訴法502条の異議申立ての対象となるのかについて先例等がない状態において、控訴人を実体的に救済する必要性が極めて高いから、補充性の要件を満たさないとして本件義務付けの訴えを不適法とした原審の判断は、行訴法37条の2第1項の解釈適用を誤るものであると主張する。

しかしながら、上記アで説示したとおり、(刑事施設の長の申請の有無を問わず)刑の執行順序の変更をしないという不作為についても刑訴法502条の異議申立ての対象となると解するのが相当であり、刑訴法上、特別の不服申立手続が定められている以上、裁判の執行に關し検察官のした処分に不服のある者は、刑訴法が定める手続によってこれを争うべきであって、他の訴訟手続である行政事件訴訟手続によってこれを争うことは許されないと解するのが相当である(最高裁平成3年(オ)第1925号同4年7月17日第二小法廷判決・民集46巻5号538頁参照)。したがって、本件義務付けの訴えを不適法却下した原審の判断は相当であり、控訴人の主張は採用することができない。

エ 控訴人は、本件義務付けの訴えの適法性について、その他るる主張するが、いずれも独自の見解を述べるものであり、採用することができない。

### (2) 本件順序変更をしないことの国賠法上の違法性及び過失の有無について

ア 控訴人は、刑訴法474条ただし書による刑の執行順序の変更は、主として行刑上受刑者の仮釈放の資格の早期取得の利益のために運用されているから、受刑者の利益になる方向で検討される必要があると主張する。

しかしながら、刑の執行順序の変更は、懲役刑執行中に軽い罰金刑(労役場留置)の時効の完成を阻止するなど、判決の適正な執行確保の目的でも行われており、行刑上、受刑者の利益になる方向のみで検討される必要があると解することはできない。また、刑の執行順序の変更が主として受刑者の仮釈放の資格の早期取得の利益のために運用されている実態が認められるとしても、そのことから直ちに刑の執行順序の変更に係る検察官の裁量が羈束されるものともいえない。

イ 控訴人は、検察官が刑の執行順序の変更をするか否かを判断するに当たり、仮釈放の許否に関する事情を考慮することが妨げられないのであれば、検察官に仮釈放の権限を事實上与えるに等しく、受刑者の仮釈放の実質的要件の有無については、地方委員会における仮釈放審理で審理されるべき事柄であるから、検察官がこれを考慮すべきではないなどと主張する。

しかしながら、刑訴法474条ただし書は、検察官が刑の執行順序の変更をし得る旨のみを定め、その要件や時期等について一切規定していないことから、刑の執行順序の変更の当否、時期等の判断については、検察官の広範な裁量に委ねられているものと解され、検察官は、妥当な行刑的処遇、判決の適正な執行の確保等を目的としてこれを判断することになるから、その判断に当たり仮釈放審理で審理されるような事情も当然に考慮の対象となり得るものと解される。そして、刑訴法474条ただし書が、検察官に刑の執行順序の変更の当否、時期等の判断を委ねている以上、2個以上の懲役刑に処せられた者について、検察官の判断によって仮釈放審理を受けられる資格を得られるか否かが左右されることとは、法が当然に予定しているところと解され、検察官が裁判の執行の監督をもそ

の職務としていること(検察庁法4条)を併せ考えると、検察官が、刑の執行順序の変更の当否、時期等を判断するに当たって、仮釈放の許否に関する事情を考慮することが許されないということはできない。控訴人の主張は採用することができない。

ウ 控訴人は、受刑者の受刑状況を最もよく把握しているのは、刑事施設の長であるから、その判断が尊重されるべきであり、刑の執行順序の変更を行えば比較的短期間で仮釈放審理を受ける資格が得られるものと認められ、身元引受人が決まっている場合には、刑事施設の長から刑の執行順序の変更の申請があったか、それがなくとも一定の合理的期間を経過した場合には、検察官が刑の執行順序の変更をしないことは、その裁量権の範囲を逸脱又は濫用するものとして違法となる旨主張する。

しかしながら、上記イのとおり、刑の執行順序の変更の当否、時期等の判断については、検察官の広範な裁量に委ねられていると解されるところ、検察官は、受刑者の受刑状況以外にも執行中の刑及び執行順序の変更をする刑に係る犯罪事実等の諸般の事情を考慮して判断することになるから、刑事施設の長からの申請や一定期間の経過によって、当然に検察官が刑の執行順序の変更をすべき義務を負うものとはいえない(なお、上記(原判決「事実及び理由」欄第3の3(5)~(7))のとおり、控訴人について、岐阜刑務所長から刑の執行順序の変更の申出がされたが、その事由はないとして刑の執行順序の変更をしなかった東京高検検事長の判断について、裁量権の範囲を逸脱する違法はないと判断した東京地方裁判所の判決が確定している)。

エ 控訴人は、原審が、控訴人の受刑状況として、本件訴訟提起後の事情をも含めて、控訴人本人が本人尋問で自ら述べた規律違反行為を認定し、これを判断の基礎としたことを非難する。

しかしながら、刑の執行順序の変更が、受刑者の妥当な行刑的処遇をも目的として行われる以上、その当否や時期等を判断するに当たって、受刑者の規律違反行為の有無や回数等を考慮することが不合理であるとはいはず、原審

年の本件懲役刑が未執行であるために、そもそも仮釈放審理を受ける資格を有していないことになり、このままでは控訴人は仮釈放されることなく、事実上の終身刑として一生刑務所から出られないという結果を招来するという著しく正義に反する事態になるのであり、その事態から控訴人を実効的に救済する必要性が極めて高いと考えられる。したがって、補充性の要件を満たさないことを理由として、本件義務付けの訴えを不適法とした原判決の判断は、行訴法37条の2第1項の解釈適用を誤るものである。

現実に、検察官の不作為に対して異議を申し立てるしか救済の手段がないとすれば、単なる異議の申立てでは、検察官に刑の執行順序の変更をさせることで実現することはできず、結局、検察官に刑の執行順序の変更をさせるという目的を達するためには、検察官にこれを義務付けるしかないであるから、これが不適法とされるのでは、申立人は救済されないことになる。

本件のように、未だ法律の解釈と運用が確定していない場合、目的は不当な不作為を是正し、請求者の利益を守ることにあるから、一方の手続が正しく、他方が誤りであると決めつけることは避けるべきであり、どちらの手続でも可能とすることが法の趣旨に合致する。

(2) ア 従来から、刑訴法474条ただし書による刑の執行順序の変更は、主として行刑上受刑者の仮釈放の資格の早期取得の利益のために運用されていると指摘されてきたところであり、刑の執行順序の変更は、受刑者の利益になる方向で検討される必要がある。

原判決は、検察官が裁判の執行の監督をその職務とするものであることを指摘し、その根拠として検察庁法4条を挙げているが、そこから直ちに、検察官が、刑訴法474条ただし書による刑の執行順序の変更に関する判断に際して、仮釈放の許否に関する事情を考慮することができるかが導かれるものではない。

イ 原判決のように、検察官がその権限行使において仮釈放の許否に関する事情を考慮するこ

とを妨げられないとするのは、検察官に、仮釈放の許否の権限を事実上与えるに等しいものであり、その判断を先取りする形で検察官に行わせることになるが、刑の執行順序変更の制度は、あくまでも、受刑者に対して、仮釈放審理を受ける資格を付与する制度であり、その受刑者について仮釈放の実質的な要件があるかどうかについては、地方委員会における仮釈放審理において審理されるべき事柄であり、両者は別であると解されなければならない。

ウ 検察官は、受刑者の受刑状況を把握しているわけではなく、それを最もよく知っているのは刑事施設の長であり、その判断を尊重すべきである。

仮釈放の形式的要件である仮釈放資格の取得期間を既に経過し、まだ受刑していない刑についても刑の執行順序の変更をすれば比較的短期間で仮釈放審理を受ける資格が得られると認められ、身元引受け人が決まっているとの要件が備わっており、刑事施設の長から刑の執行順序の変更の申請があったか、それがなくても一定の合理的期間を経過した場合に、検察官が刑の執行順序の変更を行わない場合には、その検察官の裁量権行使は逸脱又は濫用しているものとして違法になると解すべきである。

原判決は、仮釈放の審理を受ける資格と仮釈放が認められる資格とを混同しており、本件は専ら仮釈放の審理を受ける資格の問題であり、それは仮釈放が認められるか否かの前段階の問題であるから、仮釈放が認められるか否かに比べて、広く認められるべきである。

エ 上記のとおり、そもそも刑の執行順序の変更をするか否かの判断において、仮釈放の許否に関する事情を考慮すべきであるから、原審が、詳細な事実認定を行った上で、仮釈放の要件である「改悛の状」が存在しないとの評価を基礎付ける事情として仮釈放の許否の判断において相当程度考慮されるべきであるとして、控訴人に仮釈放の資格を取得させるために本件順序変更をするのが相当な事情を考慮しても、東京高検検事長が平成27年3月10日以降において本件順序変更をしなかった行為が

著しく不合理であるとは認められないと判断している点については、法令の解釈適用を誤るものである。

特に、控訴人の受刑状況として、本件訴訟提起後の事情をも含めて認定し、仮釈放の要件である「改悛の状」が存在しないとの評価を基礎付ける事情として判断したことは、重大な誤りと言わなければならない。

#### 4 被控訴人の当審における補充主張

(1) ア 刑訴法482条の規定する自由刑の裁量的執行停止については、法令上、受刑者の請求権は規定されておらず、法令に基づく申請は観念できないから、受刑者が刑の裁量的執行停止事由があるとして刑の執行停止を上申しても、検察官の職権発動を促すものにすぎず、検察官は、上申がなくとも、職権で同条の規定する事由の存在を認識したときは自由刑の執行を停止することもできるし、停止しないこともできる。そして、刑の裁量的執行停止事由があるにもかかわらず自由刑の執行を停止しないという検察官の裁量行為について、刑訴法502条の異議申立てによってその違法性を争うことができるとするが、検察官の裁判の執行に関する処分の適否を争う機会を提供して受刑者等の救済を図るという同条の趣旨に適うことは明らかであるから、事実上の申請すらない状態において、検察官がその裁量に委ねられている行為をしない状態(不作為)も、刑訴法502条の「執行に関し検察官のした処分」に含まれると解すべきである。したがって、事実上の申請もない状態において、検察官がその裁量に委ねられている刑の執行順序を変更しない行為(控訴人のいう「不作為」)も刑訴法502条の「執行に関し検察官のした処分」に含まれる。

イ 刑訴法の注釈書の中には、刑訴法442条ただし書の再審請求に関する刑の任意的執行停止に関し、「まったくの自由裁量ではなく、執行停止をしないことが著しく不当な場合には、刑の執行に関する異議の申立て(刑訴法502条)ができる」と解すべきであろう。(後藤昭ら「新

コンメンタール刑事訴訟法〔第2版〕1085頁)との記述や、「再審請求認容の蓋然性が高いのに、再審請求人側の申出に従わず、検察官が刑の執行の停止をしない場合、異議の申立てを認めるべきである。再審請求人は、刑を言い渡した國法上の裁判所に異議の申立てをする(同法502条)」(河上和雄ら「大コンメンタール刑事訴訟法〔第2版〕第10巻」125頁)との記述があり、これらの記述を前提としても、控訴人の主張が誤りであることは明らかである。

(2) 刑訴法474条は、2以上の主刑の執行は、原則として重いものから執行するものとし、刑の執行順序の変更は例外とすることのみ定め、その例外の要件等については何ら規定していないのであるから、刑の執行順序の変更を行うか否か等は、検察官の広範な裁量に委ねられているが相当であり、受刑者に不利益な方向で判断することは許されないとするが、控訴人の主張は独自の見解というほかない。実務上も、重い刑である懲役刑の執行中に軽い刑である労役場留置の時効の完成を防止するために刑の執行順序を変更するなど、必ずしも受刑者の利益のためにされるものではない。

#### 第3 当裁判所の判断

1 当裁判所も、本件義務付けの訴えは不適法であり却下すべきであり、控訴人の国家賠償請求は理由がなく棄却すべきものと判断する。その理由は、次のとおり補正し、次項に控訴人の当審における補充主張に対する判断を付加するほかは、原判決「事実及び理由」欄の第3記載のとおりであるから、これを引用する。

- (1) 原判決17頁13行目の「変更しない」を「変更をしない」に改める。
- (2) 原判決22頁13行目の「412」の後に「414, 415, 469」を加える。
- (3) 原判決23頁5行目の「いた」を「入れた」に、同行の「同年」を「平成22年」に、それぞれ改める。
- (4) 原判決24頁21行目の「22」の後に「

外の要素を混入させる重大な事由がある場合にその刑の執行を停止することにより、執行を純粹に受刑者個人の身体自由の剥奪に限る趣旨に出たものであるのに対し、刑訴法474条ただし書に基づく刑の執行の順序変更は、それが仮釈放の資格の早期取得のために行われる場合には、受刑者の改善更生を目的として施設内処遇から社会内処遇に刑の執行態様を変更するために行われるものであって、両者は、一旦受刑者の収容を解くという点で同一の効果があるとはいえる、趣旨目的等を異にする別個の制度である。これらのことからすれば、刑訴法482条2号に基づく自由刑の執行停止事由に該当することをもって、東京高検検事長に本件順序変更をすべき義務があるということはできない。

したがって、原告の前記主張は採用することができない。

#### 第4 結論

以上のとおりであるから、本件訴えのうち、刑の執行順序の変更の義務付けを求める部分は不適法であるから却下し、原告のその余の訴えに係る請求は理由がないから棄却することとし、訴訟費用の負担につき、行訴法7条、民事訴訟法61条を適用して、主文のとおり判決する。

名古屋地方裁判所民事第9部

裁判長裁判官 角谷昌毅

裁判官 山田亜湖

裁判官 大曾根史洋

平成31年2月4日  
名古屋地方裁判所民事第9部  
裁判所書記官 持田敏和

名古屋高等裁判所  
2019.12.11

控訴審判決

岐阜市則松1丁目34-1 岐阜刑務所収容中

控訴人 泉水 博

同訴訟代理人弁護士 安田好弘

同 山下幸夫

東京都千代田区霞が関1丁目1番1号

被控訴人 国

同代表者法務大臣 三好雅子

処分行政庁 東京高等検察庁検事長

同 黒川弘務

同 沢田直樹

同 山本利尚

同 石黒愛介

#### 主文

- 1 本件控訴を棄却する。
- 2 控訴費用は控訴人の負担とする。

#### 事実及び理由

##### 第1 控訴の趣旨

- 1 原判決を取り消す。
- 2 東京高等検察庁検事長は、控訴人について、強盗殺人罪による無期懲役刑の執行を停止し、旅券法違反の罪による懲役2年の刑を執行する刑執行順序変更をせよ。
- 3 被控訴人は、控訴人に対し、22万円及びこれに対する平成28年5月12日から支払済みまで年5分の割合による金員を支払え。

第2 事案の概要(略語は、原判決の例による。  
以下、本判決において同じ。)

1 控訴人は、強盗殺人罪により無期懲役刑(本件無期懲役刑)に、旅券法違反の罪により懲役2年の刑(本件懲役刑)にそれぞれ処せられ、岐阜刑務所に収容中の者であり、これまで本件無期懲役刑のみが執行され、本件懲役刑は執行されていない。

本件は、控訴人が、被控訴人に対し、東京高等検察庁検事長(東京高検検事長)は、控訴人が78歳に達した平成27年3月10日以降、刑訴法474条ただし書に基づいて刑の執行順序を変更し、本件懲役刑を執行して控訴人に仮釈放審理を受ける機会を与えるべきであったのに、その裁量の範囲を逸脱又は濫用してこれをしないとして、本件無期懲役刑の執行を停止して本件懲役刑を執行する旨の刑の執行順序の変更(本件順序変更)をすることの義務付けを求める(本件義務付けの訴え)とともに、東京高検検事長が本件順序変更をしないことが違法であり、これにより精神的苦痛を被ったとして、国賠法1条1項に基づき、合計22万円(慰謝料20万円及び弁護士費用2万円)及びこれに対する本件順序変更をすべき始期の後である平成28年5月12日(訴状送達の日の翌日)から支払済みまで民法所定の年5分の割合による遅延損害金の支払を求めた事案である。

原審は、本件義務付けの訴えを却下し、控訴人の国家賠償請求を棄却したところ、控訴人が控訴を提起した。

2 関係法令等の定め、前提事実、争点及び争点に関する当事者の主張の要旨は、次のとおり補正し、次項以下に当事者の当審における補充主張を付加するほかは、原判決「事実及び理由」欄の第2の2~5記載のとおりであるから、これを引用する。

- (1) 原判決4頁3行目の「更生法護法」を「更生保護法」に改める。
- (2) 原判決5頁14行目の「仮釈放」の後に「の申出」を、同頁18行目の「本件回答につき」の後に「裁判の」を、それぞれ加える。
- (3) 原判決6頁10行目の「同日」の後に「以後の日である平成28年5月12日(訴状送

達の日の翌日)」を加える。

##### 3 控訴人の当審における補充主張

(1) ア 控訴人は、東京高検検事長が、平成27年3月10日以降に本件順序変更をしなかつた行為を問題としているのであり、岐阜刑務所長からの申請に対してされた東京高検検事長の判断(本件回答)ではなく、それ以後、何も判断していない行為を「不作為」であると主張するものである。すなわち、刑事施設の長である岐阜刑務所長にしか控訴人の刑の執行順序変更の申請権がないことから(執行事務規程(平成28年法務省刑総訓第3号)39条1項)、その申請がない状態において、検察官が刑の執行順序の変更をするとの判断をしない行為をもって「不作為」と主張するものであり、申請を前提とする場合と異なり、明示的に検察官の判断が表示されていないことから、处分性が明確であるとはいえない、このような意味での「不作為」が刑訴法502条に含まれると明言する文献は一切存在しない。

イ 原判決は、刑訴法309条2項の異議の申立ての対象となる「処分」に不作為の事実行為も含まれることを指摘するが、同項の「処分」の主体は裁判長であり、主体が異なっている以上、直ちに刑訴法502条の「検察官のした処分」に不作為を含むと解することはできない。

ウ 行訴法37条の2第1項が定める補充性の要件については、救済の必要性の観点から、重大な損害を生ずるおそれに関する要件と相まって判断されるべきものであり、事実上又は法律上他に救済を求める方法があり得るとしても、権利救済の実効的救済の観点から、その方法が、義務付けの訴えとの対比において適切な方法であるか否かという判断をすべきである。

そして、不作為による「検察官の処分」が刑訴法502条の異議申立ての対象となるかどうかにつき、先例となる裁判例も学説もない状況において、本件については、控訴人が本件無期懲役刑について既に40年以上もの長期間にわたって受刑しているにもかかわらず、懲役2

(3) 検討

ア(ア) 前記前提事実(1)並びに前記認定事実(2)ア(ウ)及び(エ)によれば、①本件無期懲役刑に係る犯罪は、強盗殺人罪であり、その犯行は、原告及び共犯者が、数回にわたって犯行計画に検討を加えて犯行道具等を準備し、犯行日の前々日から連日機会をうかがうなど用意周到なもので、その態様は、原告において被害者をいきなり背後から押さえつけ、共犯者において胸部等をナイフで何度も突き刺して即死させ、金品を物色するなどした極めて残酷かつ非情なものであり、その結果は極めて重大なものであること、②もとより被害者には何らの落ち度もなく、被害者の被った恐怖感は大きく、突如生命を奪われた無念さは計り知れないものである上、被害者の幼い長男は、鮮血に染まった母の姿を発見し、目の当たりにしたことにより極めて大きな精神的衝撃を受け、残された家族の精神的苦痛も甚大なものであったこと、③本件は「重役夫人殺し」として社会を震驚させ、社会に大きな衝撃や不安を与えたことなどが認められる。

また、前記認定事実(2)ア(カ)及び(キ)並びにウによれば、(a)日本赤軍は、ダッカ事件等の国際テロ事件を引き起こしていたこと、(b)原告は、本件無期懲役刑の受刑中、日本赤軍によるダッカ事件により身柄拘束が解かれ、その後、自ら日本赤軍の構成員に加わり、活動していたこと、(c)本件懲役刑に係る犯罪の内容は、原告が、日本赤軍の活動の一環として、日本赤軍の構成員らと共に、ダッカ事件等の実行犯であった日本赤軍の構成員の使用に供するものとして、不正に他人名義の旅券の交付を受けたというものであることなどが認められ、これらの事実に照らすと、本件懲役刑に係る犯罪は当時、国際的なテロ事件を引き起こしていた日本赤軍の活動に寄与する悪質なものであり、国際社会に及ぼす影響も少なくないといふことができる。

(ウ) これらの諸点に照らすと、東京高検検事長が妥当な行刑上処遇の観点から本件順序変更をしないと判断することには相応の合理性があるといふべきであり、①本件無期懲役刑の執行が、平成27年3月10日時点において42年を経過し、本件通達が無期刑受刑者について仮釈放審理を開始するものとする期間を経過していること(前記認定事実(2)イ(ア))、②原

とが国賠法上違法である旨を主張するものであるところ、原告は、平成27年3月10日以降、平成29年12月に担当侮辱により1回、平成30年3月に理由なしの作業拒否で1回、同年5月に同室部屋長との口論により1回、懲罰を受けており(前記認定事実(2)イ(エ))、これららの懲罰が不当なものであったことを認めるに足りる的確な証拠はなく、原告の岐阜刑務所における受刑状況は良好なものではないといふことができる。

(イ) 前記(1)に説示したところによれば、刑訴法474条ただし書に基づく刑の執行順序の変更をするか否かの判断においては、仮釈放の許否に関する事情も考慮することができると解されるところ、仮釈放は、受刑者の改善更生のために受刑者を刑期満了前に仮に釈放するものであるから、その許否の判断においては、受刑者の改善更生と共に、社会一般の正義感情や司法の機能に対する国民の信頼の確保という観点を考慮する必要があり、このような観点からすると、本件無期懲役刑及び本件懲役刑に係る犯罪に関する前記(ア)の諸事情は、仮釈放の許否の判断において相当程度考慮されるべきものであるといふことができる。また、本件無期懲役刑及び本件懲役刑に係る犯罪に関する前記(ア)の諸事情に加え、平成27年3月10日以後における原告の受刑状況が良好なものではないことは、原告の悔悟の情や更生の意欲の存在に疑念を生じさせ、再び犯罪をするおそれをうかがわせる事情といふことができ、仮釈放の要件である「改悛の状」が存在しないとの評価を基礎付ける事情として仮釈放の許否の判断において相当程度考慮されるべきものであるといふことができる。

(ウ) これらの諸点に照らすと、東京高検検事長が妥当な行刑上処遇の観点から本件順序変更をしないと判断することには相応の合理性があるといふべきであり、①本件無期懲役刑の執行が、平成27年3月10日時点において42年を経過し、本件通達が無期刑受刑者について仮釈放審理を開始するものとする期間を経過していること(前記認定事実(2)イ(ア))、②原

告は、同日時点で78歳と相当高齢であること(前記認定事実(2)ア(ア))、③原告は、別件訴訟及び本件訴訟において、日本赤軍から協力を求められても拒否する社会に出て恩返しがしたいなどの気持ちが生じたことなどを供述していること(前記認定事実(2)エ(ア))、④身元引受人がいること(前記認定事実(2)オ)など原告に仮釈放の資格を取得させるために本件順序変更をするのが相当とする事情を考慮しても、東京高検検事長が平成27年3月10日以降において本件順序変更をしなかった行為が、受刑者の妥当な行刑的処遇の観点から著しく不合理であるとは認められないといふべきである。

したがって、東京高検検事長の前記行為は、国賠法1条1項の適用上違法であるということはできないといふべきである。

イ 以上に対して、原告は、平成27年3月10日時点において、既に約42年の長期間にわたって本件無期懲役刑を受刑しているにもかかわらず、本件懲役刑が未執行であるために仮釈放審理を受けることができないのであって、本件通達に定める30年の期間が十二分に経過しているから、東京高検検事長には本件順序変更をすべき義務がある旨主張する。

しかしながら、本件通達の規定は、その規定内容に照らし、無期刑について刑の執行が開始されてから30年が経過したときには、それだけで仮釈放審理を開始すべき旨を定めたものであり、主刑が2つ以上あり、かつ、無期刑以外の刑について受刑が開始されていない受刑者を対象とはしていないし、この点を措いても、本件通達は、法務省保護局長が地方更生保護委員会委員長及び保護観察所長に宛てたものであり(甲4)、このような通達によって、刑訴法474条ただし書に基づく検察官の裁量権が制約されることは解されない。そうすると、本件通達の規定により仮釈放審理を開始すべきとする30年の期間の経過のみをもって、東京高検検事長に本件順序変更をすべき義務があるといふことはできない(なお、本件通達第2の1

項の括弧書きには当該無期刑受刑者が仮釈放を取り消されて収容された者であるときは、当該収容の日から30年が経過したときは、その経過した日から起算して1年以内に、更生保護法35条1項の規定に基づき、必要があると認めて仮釈放審理を開始するものとするとされているところ、原告はダッカ事件において超法規的措置により釈放された後、旅券法違反により逮捕されて再収容されたものであり、仮釈放後に犯罪をして仮釈放を取り消されて収容された者と同様の利益状況にあるといえる。そして、前記認定事実(2)イのとおり、原告は昭和63年6月10日に収容され、口頭弁論終結時点においては、当該収容の日から30年が経過しているものの、その経過した日(平成30年6月10日)から起算して1年を経過していないことからすると、原告は、本件通達第2の1項の括弧書きに定める期間を経過していないことになり、本件無期懲役刑のみを考えても仮釈放審理を開始すべきであるとはいえないことになる。)

したがって、原告の前記主張は採用することができない。

ウ また、原告は、刑訴法482条2号は、懲役刑については、裁量的な刑の執行停止事由として「年齢が70歳以上であるとき」と規定しているところ、原告は任意的な刑の執行停止事由に達してから、平成27年3月10日以後、既に8年が経過していることからすれば、東京高検検事長には本件順序変更をすべき義務があると主張する。

しかしながら、刑訴法482条に基づく自由刑の執行停止は検察官の裁量によるものであり、同条2号に規定する刑の執行停止事由に該当するからといって刑の執行停止が義務付けられるものではない以上、同号による刑の執行停止との均衡をもって、刑訴法474条ただし書に基づく刑の順序変更が義務付けられるとはいえない。この点を措いても、刑訴法482条に基づく自由刑の執行停止は、自由刑の執行により受刑者本人に不当な不利益を与えるなど自由剥奪以

け、日本赤軍の構成員として活動し、機関誌の作成等を手伝うなどしていたが、昭和63年6月7日、フィリピン共和国内において潜伏中、身柄を拘束されて退去強制処分を受け、同月8日、本邦へ向かう航空機内において旅券法違反により通常逮捕された。そして、同月10日、本件無期懲役刑が執行され、原告は、同年7月6日、東京拘置所に収容された。(甲1(415, 416, 470, 472), 9(7ないしII, 21頁))

(キ) 原告は、平成3年1月18日、東京地方裁判所において、旅券法違反の罪により懲役2年の刑(本件懲役刑)に処する旨の有罪判決を受けた。その犯罪事実の概要は、原告が日本赤軍の構成員らと共に謀の上、當時指名手配中であり、ダッカ事件等の実行犯であった日本赤軍の構成員の使用に供するものとして、不正に他人名義の旅券の交付を受けたというものである。東京地方裁判所は、前記判決において、①取得方法は巧妙で、犯情は悪質であること、②原告が積極的な役割を果たしたこと、③反省の情も認められないことなどを理由として、懲役2年に処するのを相当とした。原告は、前記判決を不服として東京高等裁判所に控訴したが、平成4年11月10日、同控訴を棄却する判決を受け、さらに、同判決を不服として最高裁判所に上告をしたもの、平成7年3月28日、上告を棄却する決定を受けた。(甲1(434ないし465), 16)

#### イ 原告の受刑状況等

(ア) 本件無期懲役刑は、昭和36年5月9日に刑の執行が開始されたが、その後、刑の執行順序の変更により昭和47年6月8日に本件無期懲役刑の執行が停止され、前記ア(イ)の窃盗罪に係る刑(本件無期懲役刑に係る犯行が執行猶予中の犯行であったため、執行猶予が取り消されたもの)の受刑が開始された(この間の本件無期懲役刑の執行期間は約11年1ヶ月)。そして、前記ア(イ)の窃盗罪に係る刑の受刑が終了した昭和48年4月9日から再び本件無期懲役刑が執行されたものの、昭和52年10月2日に原告がダッカ事件により釈放さ

れ(同日までの本件無期懲役刑の執行期間は約4年6か月)、前記ア(カ)の逮捕後である昭和63年6月10日に再び本件無期懲役刑が執行されて現在に至っている(平成27年3月10日までの本件無期懲役刑の執行期間は約26年9か月)。(甲1(412))

(イ) 原告は、平成7年7月4日、東京拘置所から岐阜刑務所に移送され、①職員の職務上の指示に違反して離席したとして、平成7年10月24日、<sup>けいひいきん</sup>軽屏禁・文書図画閲読禁止3日間の懲罰を、②工場出勤の要求の手段として拒食したとして、平成14年10月22日、軽屏禁・文書図画閲読禁止10日間の懲罰を、③昼夜独居が継続していることに不満を持ち、反抗の手段として拒食したとして、平成15年1月24日、軽屏禁・文書図画閲読禁止15日間の懲罰を、④時間外に食事していたことについて職員から指導を受けたことに対して粗暴な言動をしたとして、平成19年8月8日、閉居15日の懲罰を受けた。もっとも、以後、しばらくは規律違反行為はなく、平成22年5月20日付けの原告作成の反省文では、人命を奪うことはいかなる事情があろうと許されるものではなく、生涯を通じて反省を続けることが贖罪である、被害者の菩提を弔い続けることを欠かさず行っていくなどと記載されている。(甲1(472, 473, 477), 14, 16)

(ウ) 岐阜刑務所長は、平成22年7月22日、原告が平成19年8月27日以降は無事故を継続して規律ある生活を維持し、将来に向かって改善更生への意欲が顕著に認められるとして、東京高検査事長に対し、仮釈放の申出も視野にいたされた処遇を行うため、本件無期懲役刑の執行を同年8月9日をもって停止し、同月10日から本件懲役刑を執行する旨の刑の執行順序の変更の申請をした。しかしながら、東京高検査事長は、同月29日、その事由はないと認める旨の回答(本件回答)をし、以後、岐阜刑務所長から、検察官に対し、原告の刑の執行順序の変更の職権発動が促されたことはない。(甲1, 2, 乙5)

(エ) 原告は、平成24年9月、職員に対して粗

暴な言辞をしたとして閉居15日の懲罰を受けたほか、最近でも、平成29年12月に担当侮辱により1回、平成30年3月に理由なしの作業拒否で1回、同年5月に同室部屋長との口論で1回、懲罰を受けた。(甲16, 38, 原告本人31頁)

#### ウ 日本赤軍の状況等

日本赤軍は、ダッカ事件のほか、1972年(昭和47年)のテルアビブ空港銃乱射事件(リッダ闘争。無差別の銃乱射により一般旅行者ら100人を殺傷)を起こし、その後も、レバノン国内に活動拠点を置いて相次いで国際テロ事件を引き起こしていたが、1990年(平成2年)代中頃以降、構成員の逮捕が相次ぎ、徐々に活動の範囲が狭められ、最高幹部である重信房子が、平成12年11月に逮捕され、平成13年4月、日本赤軍の解散を宣言するとともに、日本赤軍も、同年5月の声明において解散を追認した。もっとも、平成21年には主要構成員が、平成26年には重信房子がそれぞれテルアビブ空港銃乱射事件を正当化する声明を公表しており、主要構成員も未だ国際手配中である。このような状況から、平成27年の「国際テロリズム要覧」(公安調査庁作成)では、日本赤軍は、その危険な体質に変化は見られないなどとされている。(乙1, 2)

#### エ 日本赤軍に関する原告の供述等

(ア) 原告は、本件懲役刑に係る旅券法違反の刑事裁判の被告人質問において、日本赤軍の構成員であることに後悔はなく誇りを感じていると述べ、平成7年8月21日の岐阜刑務所における調査においても、日本赤軍から退会する意思はないと言っていた。(甲9(6頁), 乙6)

しかし、原告は、平成23年から平成24年までの間に提起した国家賠償請求訴訟(原告と知人、支援者等との面会を不許可とし、又は信書の発受を禁止した岐阜刑務所長の処分が違法であるとして国賠法1条1項に基づく損害賠償を求める訴訟。以下「別件訴訟」という。)での本人尋問においては、原告が日本赤軍とともに

行動し、旅券法で逮捕された際にも日本赤軍のことについて話さなかったことについて、当然そうするべきだと考えており、今もそう思っていると述べている一方、日本赤軍の思想に賛同しているわけではなく、日本赤軍に対する義理は果たしたため、協力を求められても、拒否すると思うと供述した。また、原告は、本件訴訟での本人尋問においては、日本赤軍に関与しないし、日本赤軍側も期待していないと思うと述べ、協力を求められても、はつきりと断ることができること、社会に出て恩返しがしたいなどの気持ちが生じたことなどを供述している。(甲9(12, 13, 25, 31, 32頁), 原告本人22, 29, 30頁)

(イ) 原告は、面会や信書の発受により知人、支援者等と交流を有しているが、その中には、戸平和夫ほか1名の元日本赤軍の構成員が含まれている。このうち、戸平和夫は、レバノンなどで約2年間、原告と生活を共にし、日本赤軍の構成員として機関誌の編集等を行っていた者であり、日本赤軍によるテロやハイジャック事件に直接関与したとは認められないものの、有印公文書偽造、同行使及び私文書偽造、同行使により懲役3年の実刑判決を受けて服役した。もっとも、戸平和夫は、平成15年には服役を終えて出所し、その後は、畜産業に従事するなどしている。(甲14, 19, 20, 原告本人18, 19, 25頁)

#### オ 原告の身元引受人

平成17年7月、神父である由井滋が原告の身元引受人となることが承認され、月1回程度、原告と面会していたが、由井滋が平成28年10月30日に死亡したため、平成29年4月17日以降は、松岡由香子が原告の身元引受人となっている。松岡由香子は、平成24年以後、原告と文通を始めたものであるが、原告の身元引受人となった平成29年4月以降は、面会を重ねており、自宅に原告を受け入れる準備ができている。(甲13)

## 2 争点(3)(本件順序変更をしないことの國賠法上の違法性及び過失の有無)について

### (1) 判断枠組み

ア 国賠法1条1項は、国又は公共団体の公権力の行使に当たる公務員が個別の国民に対して負担する職務上の法的義務に違背して当該国民に損害を加えたときに、国又は公共団体がこれを賠償する責任を負うことを規定するものであるから、公務員による公権力の行使に係る行為に同項にいう違法があるというためには、公務員が、当該行為によって損害を被ったと主張する者に対して負う職務上の法的義務に違反したと認められることは必要であると解される（最高裁昭和53年(オ)第1240号同60年11月21日第一小法廷判決・民集39巻7号1512頁参照）。

そこで、刑訴法474条ただし書に基づく刑の執行順序の変更しない検察官の行為が、いかなる場合に職務上の法的義務に違反したとして国賠法1条1項の適用上違法であるかについて検討すると、刑訴法474条は、本文において、検察官が2個以上の主刑の執行を指揮する場合に重い刑の執行を先にし、軽い刑の執行を後にするという順序で執行することを原則とすることを定めた上、ただし書において、検察官は、この順序を変更し、重い刑の執行を停止して、他の刑の執行をさせることができる旨規定している。この同条ただし書の刑の執行順序の変更は、受刑者に対する妥当な行刑的処遇（例えば、仮釈放の資格を早期に取得させるため）、判決の適正な執行確保（例えば、懲役刑の執行が長期にわたる場合、軽い労役場留置の時効の完成を防止するため）などを目的として行われるものである。そして、同条ただし書が刑の執行順序の変更について具体的な要件を規定していないことからすると、刑の執行順序の変更の当否や、変更の時期等については、検察官の広範な裁量に委ねられていると解される。

以上のような同条ただし書に基づく刑の執行順序の変更に関する検察官の権限の性質等を考慮すると、同条ただし書に基づく刑の執行順序の変更をしなかった検察官の行為は、執行中の

刑及び刑の執行順序の変更をする刑に係る犯罪の内容、当該受刑者の受刑状況等の諸般の事情を総合考慮して、受刑者の妥当な行刑的処遇、判決の適正な執行確保などの観点から著しく不合理と認められるときでない限り職務上の法的義務に違反するとして国賠法1条1項の適用上違法であるとはいえないというべきである。

イ 原告は、この点に関し、仮釈放を許可する権限は、地方委員会に委ねられており（更生保護法16条1号）、仮釈放の実質的な審査は地方委員会に委ねるべきであることを根拠に、検察官が、刑訴法474条ただし書による刑の執行順序の変更に当たり、仮釈放の許否に関する事情を考慮することはできないと主張する。

しかしながら、①刑の執行順序の変更は、妥当な行刑的処遇を目的の1つとしており、その中には仮釈放の資格を早期に取得させることも含まれること、②仮釈放は、刑の執行の形態を変更するものであると解されるところ、検察官は、裁判の執行の監督をその職務とするものであること（検察庁法4条）。なお、地方委員会が仮釈放の許否を判断するに当たっては、裁判官又は検察官の意見を求めるものとされている〔本件規則22条、10条〕）などからすれば、検察官が、その権限行使において仮釈放の許否に関する事情を考慮することは何ら妨げられるものではないと解される。

したがって、原告の前記主張は採用することができない。

### (2) 認定事実

前記(1)の見地から、東京高検検事長が平成27年3月10日以降において本件順序変更をしなかったことが国賠法1条1項の適用上違法であるか否かについて検討するに、前提事実に後掲の各証拠及び弁論の全趣旨を総合すると、次の事実が認められる。

#### ア 原告の経歴及び刑事件内容等

(ア) 原告は、昭和12年3月10日に生まれ、高等学校を1年で中途退学した後、住込み店員として稼働していたところ、昭和27年11

月頃、勤務先の集金を横領し、保護観察処分を受けた。（甲1(471)）

(イ) 原告は、昭和33年7月21日、東京簡易裁判所において傷害罪により罰金6000円の有罪判決を受け、昭和35年3月7日、小田原簡易裁判所において窃盗罪により懲役10月、執行猶予3年の有罪判決を受けた。（甲1(469, 471)）

(ウ) 原告は、昭和35年9月20日、東京地方裁判所において強盗殺人罪により無期懲役（本件無期懲役刑）に処する旨の有罪判決を受けた。その犯罪事実の概要は、原告が、共犯者と共に謀して、従前から小切手の割引を依頼していた者の自宅に同人が不在の時に訪れ、小切手の割引金の返済と偽って同人の妻子のみの自宅に上がり込み金品を強取することなどを計画し、同年6月9日午後8時過ぎ頃、小切手の割引金の返済と偽るなどして同人の妻子のみの自宅に上がり込み、原告において前記妻の手や口を押さえつけ反対を制止し、共犯者において腹部、胸部等をナイフで突き刺すなどして前記妻を殺害した上、現金合計1万4500円等を強取したというものである。東京地方裁判所は、前記判決において、①(a)原告は、共犯者と共に謀し、変装用の眼鏡、被害者（前記妻）を縛るための縄、猿ぐつわ用のタオル等を準備し、数回にわたって犯行計画に検討を加え、犯行の前々日から連日機会をうかがい、被害者（前記妻）の夫の不在の機会を捉えて、自宅に上がり込み、何ら非難される点のない被害者（前記妻）をいきなり背後から押さえつけ、腹部、胸部等を何度も突き刺して即死させた上、その後、1時間近く金品を物色したこと、(b)犯行現場は凄惨なものであって、幼い長男が被害者である鮮血に染まった母（前記妻）の姿を発見し、終生ぬぐい去ることのできないような精神的衝撃を与えたこと、(e)本件が「重役夫人殺し」として世間の耳目を震駭させたことなどから、原告の責任は重大なものがあることを指摘した上、②(a)共犯者が主導的な役割を果たしたこと、(b)原告は共犯者の一突によって殺意を抱くに至ったが、当初は予期していない

かったところであることなども考慮し、無期懲役刑を選択した。（甲1(419ないし426)）

(エ) 原告は、昭和35年9月26日、前記(ウ)の判決につき、無意識で被害者の手や口を押さえつけたにすぎず、①被害者に対して殺意を抱いていないこと、②量刑が不当であることなどを主張して東京高等裁判所に控訴した。東京高等裁判所は、昭和36年4月24日、①について、原告が被害者の手や口を押さえつけ、共犯者がその間に被害者の胸や腰の辺を刺したことから、少なくとも、原告が被害者の手や口を押さえつけた時点で殺意を抱いたとすることが相当であること、②について、(a)原告は当初、殺意がなく、共犯者が主導的な役割を果たしたとしても、その犯行は、計画的な犯行で、周到、執拗な手口を用いていること、(b)被害者を即死させて金品を奪取した後、それでも足りないとして被害者の夫にも強盗を企てようとしていたこと、(c)前記(イ)の執行猶予中の犯行であることなどから、原告に無期懲役刑を科したのも相当であるとして、原告の控訴を棄却し、前記(ウ)の判決は同年5月9日に確定した。（甲1(414, 427ないし432)）

(オ) 原告は、千葉刑務所において本件無期懲役刑の受刑を開始したが、昭和50年3月22日、同刑務所の医療措置等の管理態勢を不服として、同刑務所管理部長を人質に取ろうとして同人にはさみを持って襲いかかる事件を起こし、昭和52年3月30日、公務執行妨害及び傷害罪により、懲役2年6月の刑に処する旨の有罪判決を受け、同年6月2日、保安上の理由により旭川刑務所に移送された。（甲1(469, 471), 16）

(カ) 原告は、旭川刑務所で服役中の昭和52年10月2日、ダッカ事件における超法規的措置により、バングラデシュのダッカ空港において釈放された。前記(オ)の判決に係る刑は、言渡しが確定した後、5年間その執行を受けないことにより、刑の時効が完成し（刑法31条、32条4号）、刑の執行が免除された。

原告は、前記の釈放後、日本赤軍の構成員に加わり、日本赤軍の思想教育や軍事訓練を受

(3) 本件順序変更をしないことの国賠法上の違法性及び過失の有無(争点(3))

(原告の主張の要旨)

ア 東京高検検事長は、平成22年7月29日、岐阜刑務所長から本件順序変更の申請を受けたのに対し、刑の執行順序の変更の事由はない旨の回答をしたところ(本件回答)，原告は、東京高検検事長が本件回答により本件順序変更をしなかつたことにつき、東京地方裁判所に対して異議申立てをし、平成25年11月28日付けでこれが棄却され、これに対する東京高等裁判所に対する即時抗告も平成26年1月23日付けで棄却され、平成22年7月29日時点において東京高検検事長が本件回答により本件順序変更をしないことは適法とされた。

イ しかしながら、平成27年3月10日時点では、東京高検検事長が本件回答により刑の執行順序の変更をしなかつた平成22年7月29日から約4年8か月が経過している上、原告(昭和12年3月10日生)が78歳となり、裁量的な刑の執行停止事由である70歳(刑訴法482条2号)から8年が経過し、平均余命が約10.11年という段階に至っている。

刑法28条によれば、無期刑受刑者については10年を経過した後には仮釈放することが可能となり、本件通達は、無期刑受刑者について、刑の執行が開始された日から30年が経過したときは、その経過した日から1年内に、仮釈放審理を開始するものとし、その結果仮釈放を許す旨の決定がされなかつた無期刑受刑者について、仮釈放審理終結の日から10年が経過したときは、その経過した日から1年内に仮釈放審理を開始する旨を定めている。しかるに、原告は、平成27年3月10日時点において、既に本件無期懲役刑を約42年の長期間にわたって受刑しており、同条に定める仮釈放の法定期間及び本件通達が仮釈放審理を開始する期間とする30年を十分に超えて受刑している。にもかかわらず、原告は、本件懲役刑が執行されていないため、仮釈放審理を受けることができないのであり、本件順序変更がされなけ

れば、原告は、仮釈放審理を受ける機会を奪われ、仮釈放審理すら受けられないまま死亡する可能性がある。しかも、前記のとおり、原告の平均余命が約12年という段階に至ったことからすれば、早期に本件順序変更がされなければ原告は2度目の仮釈放審理が受けられない可能性がある。

また、日本赤軍の解散後、原告は、日本赤軍とは無関係に生きる決意を固めており、このような原告の心境及び心情の大きな変化を踏まえれば、本件順序変更をせず、原告の仮釈放審理を受ける機会を奪うことは著しく正義に反する。

ウ これらの事情を考慮すれば、東京高検検事長には、平成27年3月10日以降には、その職権を発動して本件順序変更をすべき職務上の注意義務が生じていたと解すべきである。そして、東京高検検事長は、その職務上通常尽くすべき注意義務を尽くすことなく、漫然と不作為を続けていたのであり、東京高検検事長にはそのように認識しなかつたことに過失があるといるべきである。

(被告の主張の要旨)

前記(2)(被告の主張の要旨)に記載したところによれば、東京高検検事長が本件順序変更をしなかつたことが国賠法上違法とは到底認められない。

また、少なくとも、平成22年7月29日の時点で東京高検検事長が職権を発動して本件順序変更をしなかつたことについて、裁判所が東京高検検事長の判断を是認しており、その後、岐阜刑務所長が原告について刑の執行順序の変更の職権発動を促した事実はなく、原告に事情変更も認められないとからすると、東京高検検事長には、本件順序変更をしなかつたことについて過失があるということはできない。

(4) 原告の損害の有無及び額(争点(4))

(原告の主張の要旨)

原告は、本件順序変更がされないことによ

り、仮釈放審理すら受けられない状態が続いているこのままでは刑務所を出所することなく死に至るのではないかとの希望を奪われた中で毎日を過ごしているのであり、著しい精神的苦痛を受けている。それを慰謝するには少なくとも20万円は下らない。原告は、本件訴訟の追行を訴訟代理人に委任したところ、本件と因果関係のある弁護士費用として2万円が相当である。

(被告の主張の要旨)

争う。原告は本件無期懲役刑の受刑者であり、金銭をもって慰謝すべき損害が生じているとは評価できない。

第3 当裁判所の判断

1 争点(1)(本件義務付けの訴えの適法性(本案前の争点)について

(1) 刑訴法は、裁判の執行について、原則として、その裁判をした裁判所に対応する検察庁の検察官がこれを指揮する旨定める一方(472条1項本文)，裁判の執行を受ける者又はその法定代理人等は、執行に関し検察官のした処分を不当とするときは言渡しをした裁判所に異議の申立てをすることができ(502条)，さらに、この申立てについてした決定に対しては、即時抗告をすることができる(504条)としている。

このように、刑訴法上、裁判の執行に関する検察官の処分については、言渡しをした裁判所に対する異議の申立て及びこれについてされた決定に対する即時抗告という特別の不服申立手続が定められているのであるから、裁判の執行に関し検察官がした処分に不服のある者は、刑訴法が定める手続によってこれを争うべきであって、他の訴訟手続によってこれを争うことは許されないと解するのが相当である(最高裁判平成3年(オ)第1925号同4年7月17日第二小法廷判決・民集46巻5号538頁参照)。

これを本件についてみると、刑訴法474条

ただし書に基づく刑の執行順序の変更は、裁判の執行の一種であり、検察官の指揮によって行われるものであるところ、本件義務付けの訴えは、原告が、検察官に対して本件順序変更をすべきであるのにこれをしないことが違法であることを理由として本件順序変更の義務付けを求めるものであって、「裁判の執行に関し検察官がした処分」を争うものというべきである。そうすると、本件順序変更をすべきであるのにこれをしないことについての不服は、刑訴法の定める前記の特別の不服申立手続によるべきであって、他の訴訟手続である行政事件訴訟手続によることは許されないといわざるを得ない。

(2) この点につき、原告は、本件においては、東京高検検事長が刑の執行順序の変更をしないという不作為を問題にしており、このような不作為を刑訴法502条の「処分」とみるのはおよそ困難であると主張する。

しかしながら、刑訴法にいう「処分」は、一般に、事実行為及び不作為を含む広い概念であるところ(例えば、刑訴法309条2項の異議の申立ての対象となる「処分」には、被告人に対する黙秘権の不告知及び刑訴法144条ただし書に基づく証言の拒絶に対して証言を命じなかつた措置等、不作為の事実行為も含まれると解される。)，刑訴法が前記のような特別の不服申立手続を置いていることに鑑みれば、裁判の執行に関する検察官の処分といえるものはそれが行為に出たものと不作為とを問わず一律にこの手続の対象になるものと解するのが合理的であり、刑の執行順序の変更をすべきであるのにこれをしないという不作為も刑訴法502条の「処分」に含まれるものと解される。

したがって、原告の前記主張は採用することができない。

(3) 以上によれば、本件義務付けの訴えは、その余の点について判断するまでもなく、不適法であって却下を免れない。

に関する検察官の不作為についても、同条の異議申立て、さらには刑訴法504条の即時抗告によって、その適否を争うことができる。

そうすると、本件順序変更がされることに関する不服申立てについても、刑訴法所定の不服申立手続によるべきであって、行政事件訴訟を提起して争うことは許されない。また刑訴法所定の不服申立手続によることができると以上、本件義務付けの訴えは、行訴法37条の2第1項の「その損害を避けるため他に適当な方法がない」ことの要件も満たさないという点でも不適法である。

## (2) 本件義務付けの訴えの本案要件充足性 (争点(2))

### (原告の主張の要旨)

ア 検察官は、受刑者に対する妥当な行刑的処遇（例えば、仮釈放の資格を早期に取得させるため）、判決の適正な執行確保（例えば、懲役刑の執行が長期にわたる場合、軽い労役場留置の時効の完成を防止するため）などの見地に立って、適正な裁量のもとに刑訴法474条ただし書に基づく刑の執行順序の変更の当否、時期等を決めるべきものである。

刑法28条によれば、無期刑受刑者については10年を経過した後には仮釈放することが可能となり、本件通達は、無期刑受刑者について、刑の執行が開始された日から30年が経過したときは、その経過した日から1年以内に、仮釈放審理を開始するものとし、その結果仮釈放を許す旨の決定がされなかった無期刑受刑者についても、その者に係る最後の仮釈放審理の終結の日から10年が経過したときは、その経過日から1年以内に仮釈放審理を開始する旨を定めている。しかるに、原告は、既に本件無期懲役刑について約45年の長期間にわたって受刑しているにもかかわらず、2年の本件懲役刑が執行されていないため仮釈放審理を受ける資格を有していないことになり、仮釈放審理を受けることすらできないのである。このように、原告については、本件無期懲役刑について

刑法28条に定める仮釈放のための期間が十二分に経過しているにもかかわらず、本件順序変更がされることにより、事実上、仮釈放審理を受ける機会が失われ、又は制限されているに等しい結果となっているのである。また、原告は、長期の受刑を通じ、刑務所外の多数の人との面会を通じて、大きな心境の変化を生じており、社会に出て恩返しがしたいと考えるようになるとともに、日本赤軍の解散後は日本赤軍とは無関係に生きる決意を固めている。これらの原告の心境及び心情の大きな変化を踏まえれば、本件順序変更をせず、仮釈放審理を受ける機会を奪っている現状は著しく正義に反する。

以上のことからすると、東京高検検事長が本件順序変更を行わないことは、その裁量権の範囲を逸脱し、又はこれを濫用するものというべきである。

イ 被告は、刑訴法474条ただし書に基づく刑の執行順序の変更の判断に当たり、仮釈放の許否の要件を考慮することも許されると主張をするが、刑の執行順序の変更は、あくまでも、受刑者に対して、仮釈放審理を受ける資格を付与するだけの制度であり、受刑者について、「改悛の状があるとき」（刑法28条）という仮釈放の実質的な要件があるかどうかについては、地方委員会による仮釈放審理で審査されるべき事柄である。

### (被告の主張の要旨)

ア 刑訴法474条ただし書は、刑の執行順序の変更の要件等を何ら定めておらず、刑の執行順序の変更を行うか否かは検察官の広範な裁量に委ねられているというべきである。そして、検察官は、受刑者に対する妥当な行刑的処遇（例えば、仮出所の資格を早期に取得させるため）、判決の適正な執行確保（例えば、懲役刑の執行が長期にわたる場合、軽い労役場留置の時効の完成を防止するため）などの見地に立って、刑の執行順序の変更の当否、時期等を決めることができ、その際の具体的な考慮要素としては、執行中の刑に係る犯罪の内容、当該受刑者の受刑状況、判決の適正な執行確保や妥当な行刑的

処遇等の種々の事情を広範に考慮して判断することができるものと解される。そして、検察官がその判断において、適正な裁量の範囲を逸脱し、殊更受刑者の不利益を図ったなどの特段の事情が存しない限り、違法の問題は生じない。  
イ そこで、原告の執行中の刑（本件無期懲役刑）に係る犯罪内容をみると、原告による強盗殺人事件は、夜間、都内中心部において留守居の主婦を襲って登山用のナイフで滅多突きにして即死させ、金品を奪取した後、なおも主人の帰宅を待って暴行、脅迫を加え、金品を奪取しようとした事件であり、犯行手口が残虐、凶暴で刑事責任が極めて重大である。

また、妥当な行刑的処遇という点についてみると、自由刑の執行順序の変更の実益が仮釈放の資格の早期取得にあることに鑑みれば、自由刑の執行順序の変更をするか否かにおいては、受刑者に仮釈放の資格を早期に取得させるか否かを考慮することになり、具体的には、仮釈放の許可基準である①悔悟の情及び改善更生の意欲があること、②再び犯罪をするおそれがないこと、③保護観察に付することが改善更生のために相当であると認められること、④社会の情勢がこれを是認すると認められることの4つの要件に沿って、受刑者に仮釈放の資格を早期に取得させるのが相当か否かを検討することになる。

原告は、本件無期懲役刑の受刑中、日本赤軍が惹起したダッカ事件において、超法規的措置により身柄拘束が解かれたものであるところ、  
(a) ダッカ事件は国民に衝撃と不安を与えた犯罪史上まれにみる凶悪テロ事件であること、  
(b) 原告は、身柄拘束が解かれた後、自ら日本赤軍の構成員に加入した上、日本赤軍に所属する構成員らと共に、不正に他人名義の旅券の交付を受けたという旅券法違反の罪により懲役2年の刑（本件懲役刑）に処せられたこと、  
(c) 旅券法違反の罪は、過激派組織として国際的に強い非難にさらされている日本赤軍の活動手段とするために行われた悪質な犯行であったこと、  
(d) 日本赤軍の構成員の一部は、現在もなお国内外を含めて、国際指名手配中である

こと、(e) 日本赤軍は、平成27年度の国際テロリズム要覧において、その危険な体質に変化はみられないと評価されていること、(f) 原告は、岐阜刑務所に移送された平成7年8月の時点でも日本赤軍から退会する意思はないと表明していたことなどの事情を考慮すると、原告に悔悟の情及び改善更生の情があるかは甚だ疑問である上、再犯のおそれがないとは認められず、保護観察への適合性も認められず、社会の情勢が原告の仮釈放を是認するとも認め難い。

ウ 他方、原告の受刑状況をみると、原告の受刑期間は45年以上に及んでいるが、平成17年から平成26年までの10年間における無期懲役刑の執行状況によると、在所期間が40年から50年の者が27名（全体の1.5%）、在所期間50年以上の者も12名（全体の0.7%）おり、70歳代が279名（全体の15.1%）、80歳代以上が69名（全体の3.7%）いるということであり、原告のみが際立って受刑期間が長期ないし高齢というわけでもない。また、原告の主張は、平成22年7月時点において東京高検検事長が本件回答により刑の執行順序の変更をしなかつたことが違法であることを前提としてその後の事情の変更を主張するものであるところ、原告は、平成24年に1件、平成29年に1件、平成30年に2件懲罰を受けており、原告の受刑状況が平成22年7月当時と比較して改善されているとはいえない。さらに、本件通達は、刑の執行開始から30年が経過したときには、その経過した日から起算して1年以内に仮釈放審理を開始するという方針を定めているが、本件通達は、無期刑受刑者に係る仮釈放審理の機会の確保を目的としたものであって、刑訴法474条ただし書による刑の執行順序の変更の判断に当たり考慮されるべき要素にはなり得ても、刑の執行順序の変更を義務付ける根拠となるものではない。

エ 以上に照らすと、東京高検検事長が本件順序変更をしないことがその裁量権の範囲を逸脱し、又はこれを濫用するものということはできない。

処分を受け、同月8日、本邦へ向かう航空機内において、不正に他人名義の旅券の交付を受けた旨の旅券法違反により通常逮捕された。そして、原告は、同月10日から、再び釈放前に受刑していた本件無期懲役刑の受刑を開始した。(甲1)

(4) 原告は、平成3年1月18日、東京地方裁判所において、前記(3)の旅券法違反の罪により懲役2年の刑(以下「本件懲役刑」という。)に処する旨の判決を受け、同判決は、平成7年4月17日に確定した。原告は、同年7月4日、岐阜刑務所に移送され、以後、本件無期懲役刑のみが執行され、本件懲役刑は執行されなかつた。(甲1)

(5) 岐阜刑務所長は、平成22年7月22日、東京高検事長に対し、原告について、本件無期懲役刑の執行過程において、処遇成績良好であり、改悛の情も認められるとし、仮釈放も視野に入れた処遇を行うため、本件無期懲役刑の執行を停止して本件懲役刑を執行する旨の刑の執行順序の変更を申請した。しかし、東京高検事長は、同月29日、同申請について、その事由はないと認める旨回答した(以下「本件回答」という。)(甲1, 2)

(6) 原告は、平成25年9月3日、東京高検事長の本件回答につき、執行に関して検察官のした処分に当たるとして、刑訴法502条に基づく異議の申立てをした。(乙4)

東京地方裁判所は、同年11月28日、東京高検事長の本件回答に処分性はなく、仮に処分性が認められるとしても、本件回答の時点においては、裁量権の範囲を逸脱する違法はないとして、前記異議申立てを棄却した。(乙3)

(7) 原告は、平成25年12月3日、前記(6)の棄却決定に即時抗告をしたが、東京高等裁判所は、刑訴法422条に定める即時抗告の提起期間経過後にされたものであるから不適法であるとして、前記即時抗告を棄却した。(乙7, 8)

(8) 原告は、平成28年3月29日、本件無期懲役刑の執行を停止して本件懲役刑を執行する旨の刑の執行順序の変更(本件順序変更)の義務付けを求める訴え(本件義務付けの訴え)及び平成22年7月29日以降に本件順序変更をしないことが国賠上違法であるとして損害賠償金22万円及びこれに対する同日から支払済みまで年5分の割合による遅延損害賠償金の支払を求める旨の国家賠償請求の訴えを提起したが、その後、国家賠償請求の訴えにつき、平成27年3月10日以降に本件順序変更をしないことが国賠法上違法であるとして、遅延損害金の起算日を同日に変更する旨の訴えの変更をした。(当裁判所に顕著な事実)

#### 4 爭点

- (1) 本件義務付けの訴えの適法性(本案前の争点。争点(1))
- (2) 本件義務付けの訴えの本案要件充足性(争点(2))
- (3) 本件順序変更をしないことの国賠法上の違法性及び過失の有無(争点(3))
- (4) 原告の損害の有無及び額(争点(4))

#### 5 爭点に関する当事者の主張の要旨

- (1) 本件義務付けの訴えの適法性(本案前の争点。争点(1))

##### (原告の主張の要旨)

- ア 行政事件訴訟法(以下「行訴法」という。)37条の2第1項の「重大な損害」の有無について

原告は、昭和12年3月10日生まれであり、45年以上にわたって本件無期懲役刑を受刑しているところ、本件無期懲役刑の執行を停止して本件懲役刑を執行する旨の刑の執行順序の変更(本件順序変更)が認められない限り、本件懲役刑について仮釈放の要件を満たさないために1度も仮釈放審理を受けることができないまま、一生刑務所に収容され続けるしかしないことになる。したがって、東京高検事長により

本件順序変更がされないことにより原告には重大な損害が生ずるおそれがある。

被告は、無期懲役刑の受刑者は、終身にわたり懲役刑を受刑しなければならないことを前提に本件順序変更がされないことにより重大な損害が生ずるとはいえないと主張する。しかし、無期懲役刑の受刑者に対しても、10年を経過すれば仮釈放をすることができる(刑法28条)、刑事施設の長は、同条に規定する期間が経過すれば地方委員会にそのことを報告する義務を負い、仮釈放の基準に該当する場合には地方委員会に仮釈放を許すべき旨の申出をするように義務付けられ(更生保護法34条)、さらに、地方委員会の決定については、中央更生保護審査会に対して審査請求ができるのであって(同法92条)、これらのことからすると、無期懲役刑は絶対的な終身刑ではなく、無期懲役刑が絶対的な終身刑であることを前提とする被告の主張は失当である。

##### イ 行政事件訴訟によることの適否について

被告は、検察官が裁判の執行に関してした処分に対する不服申立ては、専ら刑訴法所定の手続(刑訴法502条、504条)によるべきであつて、行政事件訴訟によることは許されない旨主張する。

しかしながら、原告が問題にしているのは、東京高検事長により本件順序変更がされないという不作為であり、このような不作為を刑訴法502条の「処分」とみるのはおよそ困難である。

したがって、本件順序変更がされないという不作為については、刑訴法上の不服申立て手続は存在しないから、行訴法37条の2第1項に基づく義務付けの訴えによることが許されるというべきであるし、同項の「その損害を避けるため他に適当な方法がない」ことの要件を満たすというべきである。

##### (被告の主張の要旨)

- ア 行訴法37条の2第1項の「重大な損害」の有無について

本件義務付けの訴えは、行訴法3条6項1号

のいわゆる非申請型義務付けの訴えであり、一定の処分がされないことにより重大な損害を生ずるおそれがある必要がある。

無期懲役刑は「終身にわたらる懲役刑」として刑法に定められているから、無期懲役刑の受刑者である原告は、仮釈放や恩赦等がない限り、原則として終身にわたり懲役刑を受刑しなければならない。仮に、原告に本件順序変更がされなかつたとすると、原告はこれまでと同様に本件無期懲役刑の受刑を継続することになるが、これは、原告が無期懲役刑の受刑者である以上、法が当然に予定していることである。したがって、そのことをもって、原告に重大な損害が生ずると評価することはできない。

また、仮釈放は、受刑者が刑法28条に定める要件を充足すれば必ず仮釈放されるとか、仮釈放を求める申請権が受刑者に付与されるといったものではない。仮釈放の許否は、あくまでも行政官庁である地方委員会が広範な裁量の下に、受刑者の犯した犯罪の内容、受刑者の更生の度合い、被害者感情等諸般の事情を考慮して判断すべき事柄である(更生保護法39条1項)。そうすると、受刑者には、法律上、仮釈放を求める利益あるいは権利がないというべきであるから、仮釈放されないことが原告の損害と評価されるものではない。

したがって、本件順序変更がされないことにより原告に重大な損害が生ずるとは認められないから、本件義務付けの訴えは、不適法である。

##### イ 行政事件訴訟によることの適否について

裁判の執行に関し、検察官がした処分に対する不服申立てについては、刑訴法上、特別の不服申立て手続が定められている以上(刑訴法502条、504条)、他の手続によることは許されないというべきである。

そして、本件義務付けの訴えは検察官に刑訴法474条ただし書に基づく刑の執行順序の変更の義務付けを求めるものであるが、刑の執行は裁判の執行の一環であり、その執行順序の変更は、刑訴法502条の「裁判の執行に関し検察官のした処分」にあたり、刑の執行順序の変更

名古屋地方裁判所  
2019.2.4

一審判決

岐阜市則松1丁目34-1 岐阜刑務所収容中

原告 泉水 博

同訴訟代理人弁護士 安田好弘

同 山下幸夫

東京都千代田区霞が関1丁目1番1号

被告 国

同代表者法務大臣 山下貴司

処分行政庁 東京高等検察庁検事長

黒川弘務

指定代理人 阿部直樹

同 山本利尚

同 矢澤圭一

主文

- 1 本件訴えのうち、刑の執行順序の変更の義務付けを求める部分を却下する。
- 2 原告のその余の訴えに係る請求を棄却する。
- 3 訴訟費用は原告の負担とする。

事実及び理由

第1 請求

- 1 東京高等検察庁検事長は、原告について、強盗殺人罪による無期懲役刑の執行を停止し、旅券法違反の罪による懲役2年の刑を執行する刑執行順序変更をせよ。
- 2 被告は、原告に対し、22万円及びこれに対する平成28年5月12日から支払済みまで年5分の割合による金員を支払え。

第2 事案の概要

1 事案の要旨

原告は、強盗殺人罪による無期懲役刑及び旅券法違反の罪による懲役2年の刑を受けて岐阜刑務所に収容されたが、強盗殺人罪による無期懲役刑のみが執行され、旅券法違反の罪による懲役2年の刑は執行されていない。

本件は、原告が、東京高等検察庁検事長（以下「東京高検検事長」という。）は、原告が75歳になった平成27年3月10日以降には、刑事訴訟法（以下「刑訴法」という。）474条ただし書に基づいて刑の執行順序を変更して旅券法違反の罪による懲役2年の刑を執行し、原告に仮釈放審理を受ける機会を与えるべきであったのに違法に前記の刑の執行順序の変更を行わなかつたなどと主張して、強盗殺人罪による無期懲役刑の執行を停止して旅券法違反の罪による懲役2年の刑を執行する旨の刑の執行順序の変更（以下「本件順序変更」という。）をすることの義務付けを求めるとともに（以下「本件義務付けの訴え」という。）、東京高検検事長が本件順序変更をしないことによって精神的苦痛を受けたと主張して、国家賠償法（以下「国賠法」という。）1条1項に基づき、損害賠償金22万円（慰謝料20万円及び弁護士費用2万円）並びにこれに対する本件順序変更をすべき始期の後である平成28年5月12日から支払済みまで民法所定の年5分の割合による遅延損害金の支払を求める事案である。

2 関係法令等の定め

(1) 刑法

28条は、懲役又は禁錮に処せられた者に改悛の状があるときは、有期刑についてはその刑期の3分の1を、無期刑については10年を経過した後、行政官庁の処分によって仮に釈放することができる旨規定する。

(2) 更生保護法

ア 34条1項は、刑事施設の長は、懲役又は禁錮の刑の執行のため収容している者について、刑法28条に規定する期間が経過し、かつ、法

務省令で定める基準に該当すると認めるとときは、地方更生保護委員会（以下「地方委員会」という。）に対し、仮釈放を許すべき旨の申出をしなければならない旨規定する。

イ 35条1項は地方委員会は、前条の申出がない場合であっても、必要があると認めるときは、仮釈放を許すか否かに関する審理を開始することができる旨規定する。

ウ 39条1項は、刑法28条の規定による仮釈放を許す処分は、地方委員会の決定をもってする旨規定する。

(3) 犯罪をした者及び非行のある少年に対する社会内における処遇に関する規則（以下「本件規則」という。）

ア 12条1項は、仮釈放の申出につき、刑事施設の長は、懲役又は禁錮の刑の執行のため収容している者について、28条に定める基準に該当すると認めるとときは、更生保護法34条1項の規定による申出をする旨規定する。

イ 28条は、仮釈放許可の基準について、更生保護法39条1項に規定する仮釈放を許す処分は懲役又は禁錮の刑の執行のため刑事施設に収容されている者について、悔悟の情及び改善更生の意欲があり、再び犯罪をするおそれがなく、かつ、保護観察に付することが改善更生のために相当であると認めるときにするものとした上、社会の感情がこれを是認すると認められないときはこの限りでない旨規定する。

(4) 無期刑受刑者に係る仮釈放審理に関する事務の運用について（通達）（平成21年法務省保觀第134号。以下「本件通達」という。甲4）

本件通達第2は、申出によらない仮釈放審理の開始につき、1項において、地方委員会は、無期刑受刑者について、刑の執行が開始された日（当該無期刑受刑者が仮釈放を取り消されて収容された者であるときは、当該収容の日。以下同じ。）から30年が経過したときは、その経過した日から起算して1年以内に、更生法護法35条1項の規定に基づき、必要があると認めて仮釈放審理を開始するものとするし、

2項において、地方委員会は、1項による仮釈放審理の対象とされ仮釈放を許す旨の決定がされたなかった無期刑受刑者について、その者に係る最後の仮釈放審理の終結の日から10年が経過したときは、その経過した日から起算して1年以内に、同条1項の規定に基づき、必要があると認めて仮釈放審理を開始するものとする。

3 前提事実（当事者間に争いのない事実並びに掲記の証拠及び弁論の全趣旨により容易に認められる事実等）

（1）原告は、昭和35年9月20日、東京地方裁判所において強盗殺人罪により無期懲役の刑（以下「本件無期懲役刑」という。）に処する旨の判決を受け、同判決は昭和36年5月9日に確定し、原告は、同日から本件無期懲役刑の受刑を開始した。（甲1）

（2）日本赤軍は、昭和52年9月パリ発東京行きの日本航空の航空機をインド上空で乗っ取り、乗員・乗客合計151人を人質にとってバングラデシュのダッカ空港に着陸させた後、拘禁中の日本赤軍の構成員、原告等9名の釈放・引渡しと身代金600万米ドルを要求した。日本政府は、日本赤軍から釈放・引渡しを要求された9名のうち出国を拒否した3人を除く6人を超法規的措置によって釈放し、身代金600万米ドルと共に日本赤軍に引き渡し、人質の一部と交換した。日本赤軍は、残りの人質を連れてアルジェリアに向かい、経由地で人質を順次解放した（いわゆるダッカ事件）。（甲1、16、乙1）

原告は、日本赤軍が釈放・引渡しを要求した9名のうちの1名であり、原告は、日本赤軍からの指名を受けて釈放を希望し、昭和52年10月2日、超法規的措置により、バングラデシュのダッカ空港において釈放され、日本赤軍の構成員に加わった。（甲1）

（3）原告は、昭和63年6月7日、フィリピン共和国内において身柄を拘束されて退去強制



# 泉州国賠つうしん

## n-ro 17

### 目次

泉州国賠の仲間へ

“助っ人”人生  
追悼 泉水博さん

泉州博さんの訃報に接して

博兄  
最後まであきらめずに  
「やられてしまわない」を胸に  
あまりにも残酷な……  
泉州国賠に関わって  
猫が雪の中を歩いている絵  
傍聴に通って

宇賀神寿一  
舟橋寛延

きよみ  
谷丸祥子  
大嶽恵子  
早川しょうこ  
うめはら  
白澤吉利  
田村スマコ

泉州博さんへの  
社会復帰を認めなかった日本社会

松浦武夫

泉州国賠の経過

渡辺亜人

獄窓から 2019.5.5-2020.3.4  
面会記 [25, 31, 35-36] N, F

泉州博

岐阜刑のヒロシ  
最後の面会まで  
風の噂ふうに

富田琴太郎  
岸田哲  
中島雅一

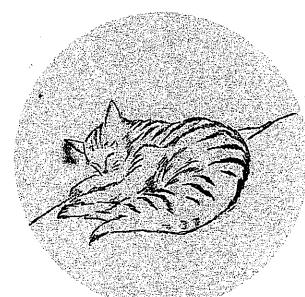
編集後記 渡辺亜人・舟橋寛延・中島雅一  
泉州博イラスト【目次】 古橋雅夫

資料・「順変」義務付け請求訴訟判決全文

判決文の掲載にあたって

一審判決——名古屋地方裁判所 2019.2.4  
控訴審判決——名古屋高等裁判所 2019.12.11  
最高裁判決——最高裁判所第一小法廷 2020.7.16

i  
ii  
xvi  
xxii



## 資料・「順変」義務付け請求訴訟判決全文

一審判決——名古屋地方裁判所

2019.2.4

ii

控訴審判決——名古屋高等裁判所

2019.12.11

xvi

最高裁判決——最高裁判所第一小法廷

2020.7.16

xxii

察によって、先回りして摘み取られた。そして、それは検察の裁量権からの逸脱・濫用だと訴えた。

一方、無期刑=終身刑を疑いのない前提とし、検察に最大限の権限を与える被告人・国。検察の権限、裁量権の範囲は、どこからどこまでか? 内容はさておき、裁判所の判断は明確で、この論点については読み誤りようはないのではないか。

### ③判決文における、卑劣な手法について

判決文には、特定の収容者に対し、無期刑を終身刑化せよとする、いわゆるマル特通達(特に犯情悪質等の無期懲役刑確定者に対する刑の執行指揮及びそれらの者の仮出獄に対する検察官の意見をより適正にする方策について(依命通達)) 最高検査第887号、平成10年6月18日)についての言及はない。

一審では、通達の証拠提出をしないのであれば、順変の基準を示せと、裁判所は被告人・国に要請したが、結局、裁判所は国に証拠を提出させることができなかつた。

開示されなかつたマル特通達、順変の基準の代わりに、裁判所が判決で並べ立てたのは何か? 強盗殺人事件のことさらに禍々しい描写、日本赤軍の「脅威」。そして、提訴後の泉州さんの受刑状態を貶めることで、順変をせず、仮釈放審理の機会を奪つた提訴前の検察のあり方を正当化するという、被告人・国側提出書面と、見紛うばかりの論理と内容だつた。

「再び犯罪をするおそれをうかがわせる事情」とまで記述の及ぶ、その一審判決の内容を、安田弁護士・山下弁護士は当然批判した。控訴審で、名古屋高裁の裁判官たちがそれに対してどのように返答したか。「第4 結論」直前、xxi頁右段「エ」——目を凝らして、文字を追つてみてください。

富田琴太郎  
i ——

### ①「順変」義務付け請求訴訟の狙い

この訴訟の要は、「順変」が現実化する可能性のない、刑事訴訟法の不服申し立て手続きではなく、行政事件訴訟法上の「重大な損害」に当たるとして、検察に「順変」を義務付ける——という、前例のない争い方にあつた。

行訴法で判断せよと迫る私たちと、刑訴法以外は許されぬとして、防戦する被告人・国。「不作為」の捉え方など、議論は難渋で、少々こみいいた応酬に映るが、上記、私たちの側の野心的な試みであつたことをお含みおきのうえ、裁判所の判断をお読みください。

### ②裁判所は、検察の権限、裁量権の及ぶ範囲をどのように規定したか?

泉州さんは、仮釈放審理を受ける機会を、検

# 泉州国賠つうしん n-ro 17

発行日 2021年5月9日

発行者 中島雅一

発行所 ☎ 484-0085

愛知県犬山市鶴洞町666 水田ふう方